東洋學藝雜誌第二十八號

第二章　中學物理授業法（續稿）

村岡範爲馳口述
福島鳳一郎筆記

獨逸ノヘルムホルツ氏ハ前ニ述ヘシ如ク熱心シテ通俗講義ヲ其國ニ廣メンヿヲ計リチンダル氏ノ講義法殊ニ氏ノ意ニ適シタルヲ以テ氏カ講義シテ出版セル書籍ヲ盡ク獨逸文ニ反譯シテ其目的ヲ達スルノ一手段トハナセリ而シテ其譯書ハ衆人ノ珍重スル所トナリ從ヒテ通俗講義モ漸々普及スルニ至リシハヘルムホルツ氏カ學者トシテ多數ノ發明等ヲ以テ學術ノ範圍ヲ廣メタルノ傍ラ此等ノ事業ヲ以テ國家ニ竭シ衆民ニ益シタルハ又唯贊稱スルニ足ルヘクシテ一点ノ誹ルヘキ所ナキ筈ナリ

然ルニ茲ニ一種ノ黨派アリテ亂リニ通俗講義家ヲ讒謗シ合セテ外國ノ學風ヲ誹議スル者アリ是レハ即チメタフサジツケルニテ殊ニ「ライプチヒ」大學ノ教授ツヨルチル氏ヲ以テ最モ甚シトス此人ハ原ト天文物理家（アストロフヰジツケル）ニテ極メテ鋭敏ナル性質ヲ有シ發明スル所モ少ナカラス獨逸ノ學者ノ内ニテモ指折リノ中間ナルヘキカ中途變ノメタフサジツケルトナリ何事モ總テ純粹ノ考究推理ヲ以テ世界ノ現象ヲ解キ數學ヲ以テ割リ出サヾル可ラスト爲シ（ヂダクションン）試驗等ヲ施シテ現象ノ有樣ヲ實事ニ徵シ實證ヲ集メテ現象ノ規則ヲ研究シ組立ツルノ法（インダクションン）ヲ不可トセリ而シテ氏若シ自己ノ說ヲ主張スルノミニ止マレハ何モ妨ケナケレトモ亂リニ他ノ法ヲ誹議スルニハ甚タ迷惑スルナリ其誹議ノ仕方モ中々勵シク語氣極メテ激烈ニシテ又可笑（カシ）クモアリ余カ如キ吶辨者ハ氏ノ語氣ヲ眞似テ此場ニ述フルヿヲ得サルナリ氏例ヘハ曰ク英國ノ學風ハ（インダクションン）ナリ故ニ英國ノ學術ハ死物ナリ其學者ハ盡ク（インダクションン）ナル蠱毒ノ爲メニ毒飼ヒセラレタル腐敗物ナリ今其蠱毒我國ニ滲入シテ日耳曼固有ノ（ヂダクションン）學風ヲ害セントス我輩ハ力ヲ盡シテ之ヲ國境ヨリ逐ヒ斥ケ萬里ノ長城ヲ築キテ其再入ヲ防カサル可ラスト（余カ述ヘ方ハツヨルチル氏ノ筆法ニ及ハサルヿ遠シ）ツヨルチル氏カ斯ノ如キ言ヲ發セルノ時ニハ英國ニハ如何ナル人物アリシト云フニフアラデイノ死骸モ猶未タ干カスマキスウエルダ—ウ（井）ン氏等ノ空氣ハ歐

板と架中左右へ自由に滑動し得べくせべ其位置を定むる
送セス
東洋學藝社

洲ノ全面ヲ滿タセルノ時ナリ氏ノ言ノ暴慢モ亦甚シキ哉

ツヨルチル氏ノ惡口唯他法ヲ誹議スルニ止マレハ猶可ナリ諸學者ノ名ヲ擧ケ其隱德ヲ訐キ落處ヲ探リ出シテ此レカ讒謗ヲ極ムルニハ一層恐レ入ラサルヲ得ス

例ヘハ氏カチンダル氏ヲ誹ルヿ次ノ如シ曰ク氏ハ數學ノ精神ナク勢力モナキ試驗ヲ以テ萬有ノ現象ヲ研究セントス（インダクシヨン）家中ノ最モ卑劣ナル者ナリ曰ク氏ハ大變ナル學者氣取リデロヤール、インスチツシヨンニ於テ小兒詐（ダマ）シノ樣ナ講義ヲ爲シ蠢民ノ喝採ヲ得ルトテ自分ハ講義ノ妙法ヲ得タリト逆（ノボ）セ上カルハ眞ニ氏カ學者ニ非サルノ確證ナリ眞誠ノ學者ハ（ヂダクシヨン）ヲ以テ物ノ理ヲ究ムルヲ以テ本業ト爲ス者ナリ學生ヲ敎授スルハ本業枝葉中ノ枝葉ナリ故ニ授業法ニ拙ナルハ即チ學者ノ學者タル所以ナリチンダル氏カ彼ノ通俗講義ヲ以テ得意然タルハ自ラ學者タラサルニ誇ルト同然ナリ曰ク氏ハ通俗講義ヲ以テ世ノ益ヲ爲スノ國家ノ爲ニスルノト言ヘ𪜈實ハ金錢ヲ貪ル者ナリ云々

ツヨルチル氏ノ人ヲ讒謗スルヿ大凡ソ斯クノ如クシテ氏カ讒謗書ヲ著述スルヿ大部ノ者十冊計リニ及ヘリ右ニ述ヘタルハ其内ノ授業法ニ關スル者ノミナリ右ノ如キ過激ノ讒謗ハ若シ平凡ノ人ヨリ出ル時ハ人唯以テ狂人ノ言トシ誰トテ之ヲ信スル者モナカルヘク故ニ又害モナカルヘケレ𪜈何分ツヨルチル氏ハ學術社會ニ於テモ隨分名ノ賣レタル人故ニ人ノ自然ニ之ヲ信仰シテヘルムホルツ氏カ折角骨折リテ廣メントスル通俗講義モ爲メニ普及ト改良ヲ妨ケラルヽノ勢ナシトセサレハ氏之ヲ默視スル能ハスシテ一ハチンダル氏ノ寃ヲ解キ一ハツヨルチル氏カ自ラ學術研究ノ道ニ迷ヒタルヲ明ニシ氏カ所謂學術ヲ蠱毒スルトハ其自己ノ身ニ適スルヿニテ英人或ハ他ノ人々ニ適セサルヲ辨駁シタリ其要旨左ノ如シ

第一（インダクシヨン）及ヒ（ヂダクシヨン）ハ學術上互ニ偏用スヘカラサル者ナリ（インダクシヨン）ニ偏シテ（ヂダクシヨン）ヲ弄ツレハ家ヲ築クニ規矩準繩ナキカ如シ（ヂダクシヨン）ニ偏シテ（インダクシヨン）ヲ欠クトハ舟ヲ行ルニ梶ナキカ如ク遂ニツヨルチル氏ノ如キ迷洋ニ漂フニ至ルヘシ第二ツヨルチル氏ハ獨逸學風ハ盡ク（ヂダクシヨ

ン）ノ如ク言ヒナセ𪜈決シテ然ラス現ニ氏カ攻擊スルチンダル氏ノ和キニ在ナノ獨逸ノ如キ者ナリ云々

ソ一ノ如ク言ヒナセ𪜈決シテ然ラス現ニ氏カ攻擊スルチンダル氏ノ如キモ主トシテ獨逸（殊ニマールブルグ）ニテ修業セシ人故其學風ハ獨逸學風ノ一ト稱シテモ可ナルヘシ又チンダル氏ヲ以テ金錢ヲ貪ル人ト言ヘ𪜈決シテ然ラス氏嘗テ米國ニ到リ學術演說ヲ爲セシニ意外ニ餘計ノ金ヲ得タレハ之ヲ米國ノ少年物理志願ノ者二人ニ分與シ獨逸國ニ各々四年間留學セシメタルヿアリ其他是等ノ美談少シトセス第三チンダル氏ハ平凡ノ演說家ノ如ク言ヒ爲セトモ氏ノ事業中重貴スヘキ者多シ又ツヨルチル氏カチンダル氏ノ謬見ナリ（インダクシヨン）ノ弊ナリトテ攻擊セル慧星ノ尾ノ理論等ニハ自己ノ謬見チンダル氏ノ謬見ニ數倍ス第四學者ハ主トシテ學術ニ從事スルヲ以テ自然授業法ニ拙ナルヲ免レサルハ勢ヒ止ムヲ得サルヿナレ𪜈學者ニシテ學生ヲ教育セス衆民ヲ導カサレハ誰カ他ニ之ヲ爲ス者アラン然ラハ其授業法ニ拙ナルハ一ノ大欠典ト云フヘキニ返テ授業法ニ拙ナルヲ以テ學者ノ學者タル所以トシ併セテ現今世人ノ要用ト見做ス所ノ貴重ノ通俗講義ヲ妨ケントスルハ坊主ヲ惡ミテ袈裟ニ及フヨリモ甚タシキ者ナリ云々

右ノ如ク（インダクシヨン）（ヂダクシヨン）二學風ノ爭論ノ御蔭ニテ通俗講義ノ普及幾分カ妨ケラレタルカ如シト雖𪜈ツヨルチル氏モ幸ニ昨年死去シヘルムホルツノ辨駁モ確乎タルヿナレハ此講義ハ益シ漸々普及改良スルニ至ルヘシ現今我國ニテモ教育會衛生會等緊要ノ協會續々開クルノ際ナレハ通俗ノ學術講義會モ亦從テ起ランヿヲ希望スルナリ

余カ本日演說ノ大旨ヲ約言センニ大學及ヒ高等ノ通俗物理講義ニ付キテハ唯獨逸及ヒ英國ノ狀況ヲ述ヘ我國モ亦漸々其域ニ進マンヿヲ希望スルノミニテ授業ノ方法ニ付キ別ニ意見ヲ呈スルヿナシ之ニ返シ小學及ヒ中學ニハ大ニ改良ヲ望ム所アリ曰ク授業ノ事柄ハ童兒生徒ノ想像内ニアル者ヲ撰フヘシ曰ク授業ノ法ハ物理學ヲ以テ既成ノ者ト爲スヘカラスクリユーゲル氏ノ誘導法ヲ以テ標本トナスヘシ殊ニ中學ニ於テハ問題ヲ解セシメテ獨立考究ノ力ヲ養フヘシ

○衛生化學上ノ一大發明飲用水不純ノ原因

理學博士　久原躬弦稿

夫レ飲用水ハ人生ノ一大必要物ニシテ片時モ之ヲ欠クヘカラス又其質ニ至テハ精良純好ナラサルヘカラス、凡ソ人間百病ノ發スルヤ飲用水ノ不良ニ根スルモノ多キニ居ル、特ニ大都府ノ用水ニ至テハ最モ注意ヲ要サヽルヘカラス蓋シ其注意スヘキ所以ノモノハ今其用水ノ一所ニ於テ汚穢物ノ混交アルキハ其水ノ流通セル地方ハ此汚物遍ク散漫シ終ニハ其害全府ニ波及スルヲ遁レサルニ至ルヘシ、此レ余カ喋々ヲ待タスシテ瞭ナリ、故ニ平常勉テ飲用水中ニ汚物ノ混交ヲ防テ其純清ナル質ヲ保タシムルコト緊要ナリ

彼ノ米國ノ諸市府ニ於ケル飲用水ニ付テ其供充法ヲ見ルニ市外適宜ノ地ニ巨大ナル池塘ヲ造リ此ニ河水ヲ引キ貯ヘ鉄管ノ方便ニ由テ之ヲ府内ノ四方ニ導キ以テ其住民ノ飲料等ニ供スルヲ普通トス、是レ恰モ我東京市街ニ於テ多摩川上水又ハ神田上水ヲ木樋ニテ導キ以テ日々ノ飲料ニ供スルト同一般ナリ、然ルニ米國ニ於テハ往時ヨリ諸市府ノ飲用水時々不純質ヲ呈スルヿアリテ住民ノ困難ニ係ルヿ實ニ鮮少ナラス即チ其不純ヲ呈スルヿニ付テハ其時日ニ長短ト其時季ニ異同ハアレトモ殆ト各市府ノ水其濁狀ヲ呈スルハ恰モ多量ノ精水ニ一二滴ノ牛乳ヲ混シタルト稍々相似タリ而シテ其水ハ必ス奇異不快ノ臭味ヲ帶フ之ヲ俗稱シテ魚臭胡瓜味（キウリ）ヲ帶フト云フ是レ市府ノ何レヲ問ハス斯ノ如ク飲用水ノ不純ナルニ方テハ一般ニ通稱ス、蓋シ眞ニ魚ノ如キ臭氣ヲ帶ヒ胡瓜ノ如キ味ヲ含ムヲ以テナラン、夫レ斯ノ如ク飲用水ノ不良、不純ヲ呈スルハ何ニ起因スルヤ之ヲ探究發見センカ爲メ多年ノ間化學家ハ其精細ノ試驗ヲ施コシ愈々微密ノ推究ヲ重ネシモ更ニ其効ヲ奏スルヿナク又顯微學者ノ精練、醫士ノ經驗生物學家ノ考案モ同シク無効ニ屬セリ實ニ其住民ノ不幸ナルヿヨリ甚シキハナシ

曩ニ余カ米國ボルチモール府ヂョンス、ホプキンス大學校ニ留學ノ際偶々同府ノ飲用水前述ノ如キ不純濁狀ヲ呈シ、彼魚臭、胡瓜味ヲ含ミ之カ爲メ日々ノ需用ニ供スルモ甚タ不快ニシテ府民一般ノ憂苦スル所トナリヌ、時季ハ即チ一千八百八十一年ノ春ニアリ其時日ハ凡ソ三週間過キスシテ又速ニ通常ノ清良水ニ復セリ、此時ニ方リテヤセン氏ハボストン府民ノ嘱托ニ應シ其地ニ就テ親シク試驗ノ焦思苦慮スル此ニ久シキノ後終ニ彼ノ不純ノ起因ハ

キスシテ又速ニ通常ノ清良水ニ復セリ、此時ニ方リテヤ余カ師同大學校化學教授レムセン氏ト同生物學教授ブルツクス氏ハボルチモール府知事ノ囑托ニ應シ其不純ノ起因發見ノ爲ニ其考索智巧ヲ竭シテ種々ノ試驗ヲ施コシヽニ或ハ冬時用水ノ源タル地塘氷結シテ空氣ノ流通自由ナラス之カ爲ニ氷中ノ有機物分解シ又ハ凍死シタル魚類ノ腐敗シタルカ故ニ斯ノ如キ不純ヲ呈スルモノナランカト憶測シ其氷ニ就テ之ヲ酸化セシムルノ試驗ヲ施シタルモ更ニ効ヲ見ス或ハ獸炭ヲ以テ濾過シ或ハ池塘ニ就テ其水底ヲ探索シタルモ腐敗ノ死魚、分解ノ有機物等一モ之ヲ發見スルヿナシ因テ其他種々ノ試驗ヲ施シタレト其目的ヲ果タサスシテ止ミヌ當時余モ亦師ニ隨ヒ此試驗ニ從事セリ

茲ニ近頃ボストン府用水ノ前ト同一ノ不純ヲ呈セルヿアリシヲ以テハヴアルド大學校及ボストン府ノ化學家等ハ潛心困苦シ以テ幽妙隱微ナル不純ノ原因考究ニ從事スルヿ既ニ久シキニ至ルモ更ニ其實効ヲ擧クルヿヲ得ス故ヲ以テ皆止ムヿヲ得ス其念慮ヲ斷テリ、此時ニ於テヤレムセン氏ハボストン府民ノ囑托ニ應シ其地ニ就テ親シク試驗シ焦思苦慮スル此ニ久シキノ後終ニ彼ノ不純ノ起因ハ全ク其水源タル池塘ニ歸スルヿヲ發見セリ即チ其池水ノ流出スヘキ口ニ鉄ノ線紗ヲ張リ其水ヲシテ迅速ニ流出セシメタルニ綠色物ノ塊線紗上ニ附着殘存セシヲ認視セリ、此綠色物ハ即チ水ニ濁狀、魚臭、胡瓜味ヲ帶ハシムルモノニシテ之ヲ試驗シタルノ後全ク淡水產海綿（スポンヂラ、フリユヴイアリス）タルヲ發見セリ蓋シ此モノハ容易ニ分解腐敗スヘキ質ヲ有ス、抑モ飲用水ニ於ケル此不純ノ原因タル大家鴻學ト雖ヒ歷久勞苦困勉シタルモ其目的ヲ果タスヿ能ハス之カ爲ニ方今衛生ノ責任ニ居ル者ハ勿論一般人民ノ頗ル憂苦シタル所ナリシカレムセン氏カ多年ノ實驗ニ由テ一朝遂ニ其原因ヲ確然証明スルニ至リタルハ是レ實ニ衛生化學上ノ一大發明ト云フヘキナリレムセン氏ノ此發明ニ就テハ余カヂョンス、ホプキンス大學校ノ一友人ヨリ唯ニ簡短ナル報知ヲ得タルノミナルヲ以テ淡水產海綿ハ池塘ニ生殖スルニ方テ斯ノ如ク水質ヲ不良ニナシ且魚臭、胡瓜味ヲ生スルノ原因如何ニ至テ

ハ未タレムセン氏ノ説ヲ詳ニ聞クヲ得サレハ之ヲ知ル能スト雖モ今淡水産海綿ニ係ルリーベルクーン氏ノ説（ハツクスリー氏著ス所ノ「アナトミー、ヲフ、インヴエルテブレーテッド、アニマルス」米國板百〇七丁ヲ見ヨ）ニ據レハ淡水産海綿ハ船槽、堀河、河、川等ノ崖岸又ハ浮遊セル木材ヲ厚キ塊トナリテ被覆シ通常綠色ヲ帶フ而シテ此モノハ病害ナクシテ成育スルニハ斷ヘス新鮮ナル水ヲ要スト此ニ由テ之ヲ見レハ池塘ニ淡水産海綿ノ生殖スルニ方リ其水氷結シ或ハ他ノ原因ニ由リ水流遲滯シ隨テ新鮮ノ水混入十分ナラサルカ爲ニ生殖スヘキ淡水産海綿ハ全ク死シテ腐敗分解シ而シテ飲用水中ニ混交シ之ニ魚臭ト胡瓜味トヲ帶バシムルモノヽ如シ然レモ此コトタル余カ臆測ニシテ決シテ証明スヘキニ非ラス他日レムセン氏ノ説刊行アルヲ待テ再ヒ詳記スヘキナリ

○かんたんなる　きかい　れ　もちいて　ぶつりがく　れ　れおゆる　こと。

きよねんの　一一ぐわつ　一一にち　と　一二ぐわつ　丸か　に　だいにほん　きよれい　くくわい　にて　なえたる　ねんせつ　れ　あ　るところわのばえ　あるところ　わ　ちぢめて　かきなれえたる　もの　なり。

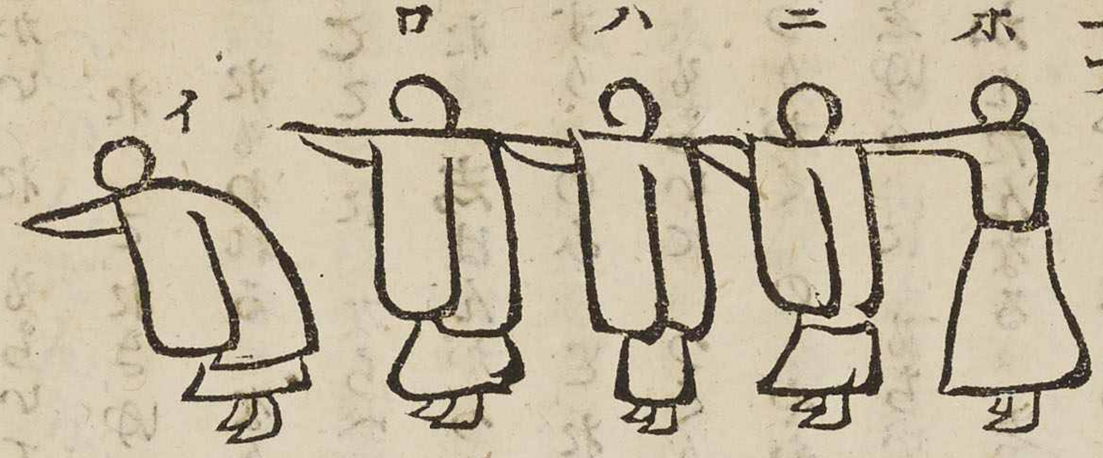
せけんの　えよれがつこれ　ちゆうがつこれ　などにて　ぶつりがく　れ　れえゆる　えかされ　きくに　れれくわ　きよれえ　がは　んれ　これえやくする　のみにて　きかい　れもちひえけん　れなえて　せいとに　えめす　ことなく　はなはだえきわ　ぶつりえよ　れよみほんのごとくもちいるもの　あり　という。これにわさまざまのげんいん　あれども　ひとつわせけんの　ひとが　ぶつりがく　に　もちいるきかいわかならず　きかいえ　のつくりたるものにて　すくなくも　ひと　くくみ　ごろくじゆうねんのものに　かぎる　こと。と　こころねちがいするに　よる　なり。かく　の　ごとき　あ

りさま　なれば　にちよれ　の　どれぐ　あるいわ
きよれゑ　の　みづから　つくりたる　かんたんなる
きかい　れ　もちいて　ぶつりがく　れ　れゑゆる　こ＝
と　れ　これきゆうする　わ　たいせつなる　こと
と　れもわれる　なり。
ここに　ならべて　ある　きかい　わ　とれき＝
よれ　ゑはんが　つこれ　の　せいと　が　のこぎり
やすり　のみ　とれ　の　ごとき　なみ　の　どれぐ
れ　もちいて　つくりたる　もの　にて　なか　にわ
ぶつりがく　の　やや　これゑよれなる　ところ　れ
れゑゆる　に　もちいられる　きかい　も　ある　なり。
かんたんなる　ゑけん　れ　なす　にわ　べつだ＝
んきかい　れ　つくる　に　れよばす　にちよれ　の
どれく　にて　まにあう　こと　あり。　たとえば
だせい　の　ゑけん　れ　なす　にわ　ほん　れ　つくえ
の　うえ　に　たいらに　れき　うの　うえ　に　ゆの＝
みれ　よこ　に　ゑて　れき　きゆうに　ほん　れ
ひく　なり。　ゑかるときわ　ゆのみ　わ　だせい

にて　あと　に　のこり　ほん　の　うえ　より　こ＝
ろがりれちる　なり。　また　うの　つぎ　に　ゆの＝
みれ　ほん　の　うえ　にのせたる　まま　うろう＝
ろ　と　うごかゑ　だんだん　と　はやさ　れ　まゑ
ふいに　うんどれ　れ　とどめる　ときわ　ゆのみ
わ　だせい　にて　さきの　ほれ　えころがりゆく
なり。　また　がいざんせい　の　ゑけん　に　みづ＝
いれ　れ　もちい　えんゑんりよく　の　ゑけん　に
からかさ　れ　もちいれん　の　はんゑや　の　ゑけ＝
んに　なかびく　のかがみ　の　かわりに　これ＝
もりがさ　れ　もちいうの　たらんぷ　の　はや
ふらすこ　はさみ　ちよれちん　などみあうれう＝
れ　かんたんなる　ゑけん　に　もちいる　こと　れ
うる　なり。　きよれゑ　ゑゑん　の　からだ　てゑ
の　ごとき　も　また　ゑけん　に　もちいる　どれ＝
くと　なす　こと　れう　べゑ。
ちんだる　わ　れと　の　くうき　れ　つたわる
ぐわい　れ　あきらかに　かてんせゑむる　ため　いち＝

れつにならべたるこどもれもちいさり。

づのごとく（一づ）こどもれいちれつにならべ ロ ハ ニ ホ のこどもれ去てれ＝のれのうのまゐのこどものかたにつか＝まら去め ホ のかたれう去ろよりふいに一づ。つくときわ ホ わ ニ れ



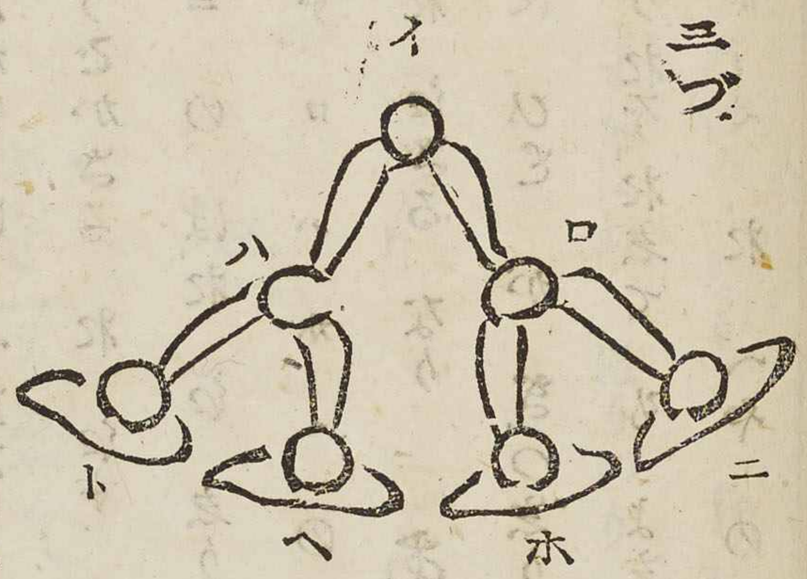
つきニわハれつきハわロれつきれのれのれ＝のれのうけたるげきど、れまゐのこもどにゆ＝づりてたいれま、つすぐにたもつことれうれどもイわうのまゐにげきど、れまたあめりかのめいゐるわかくのご＝れゆづるべきひとがれ＝ときに（二づ）ね去かたにまきたるはりがねれらぬゆゐまゐのほ、れゐたれれるなり。

もちいたり。

このはりがねのひとつのは去わかべにつけかつうのうばにちいさきすずれつけたのは去れひだりのてにもちかべとてのあいだにぶらさがるよ、れにな去てよりにさ＝んずんさきのところ（イ）れてのほ、れゐひきよ＝せてとイのあいだれちぢめふいにはなすときわはりがねのちぢみたるところがてよりかべのほ、れゐつたわりゆきすずれならすなり。イのと＝ころれふいにてのほ、れゐひくときわはりがねのびたるところがまゐ

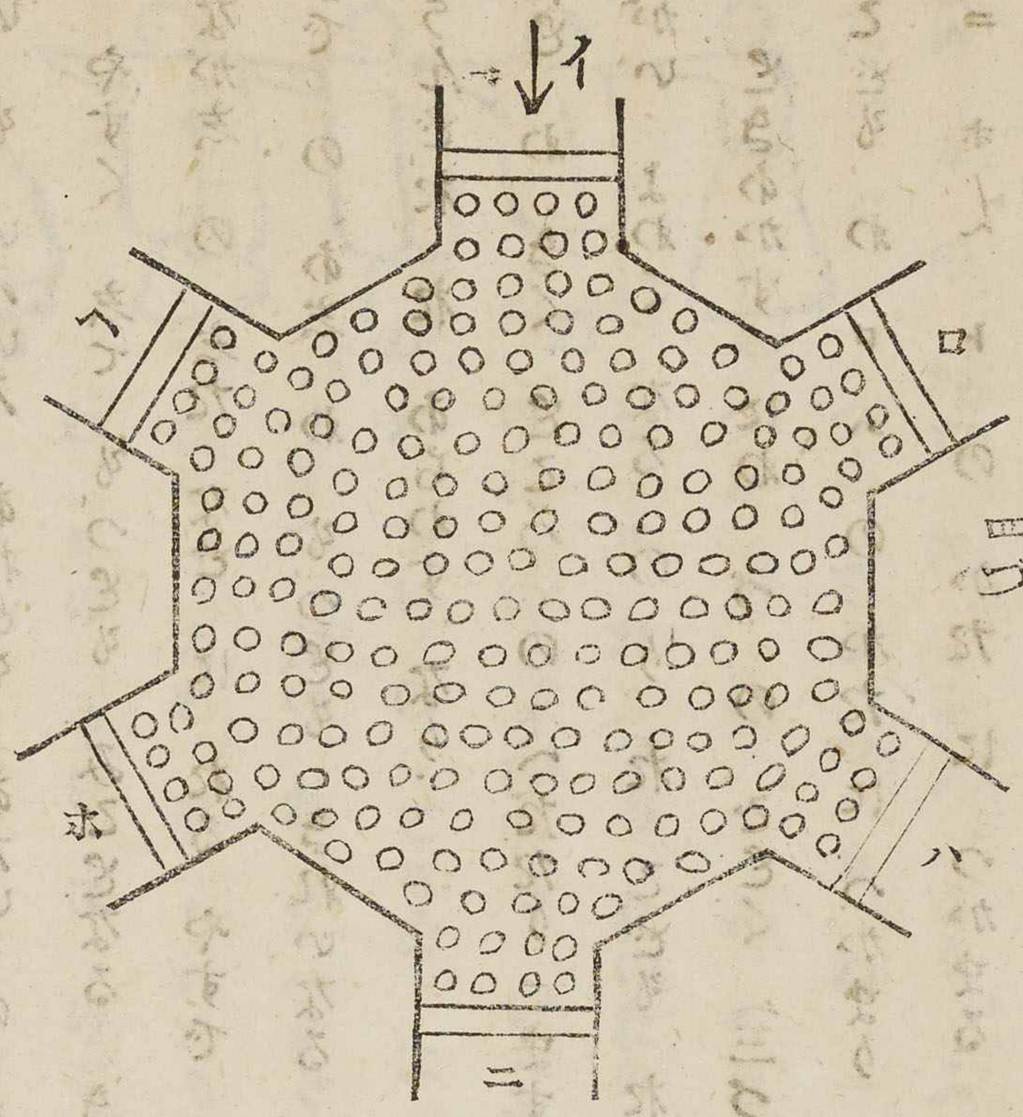
のごとくかべのほゝれゐつたわりゆきやはゝ
うすずれならすなり。
れとのくゝうきわれつたわることれとき〻
あかすかんたんなる云かたわさまざまありて
きかいもいろいろあれどもあたいのもゝつ〻
ともやすく云てもゝつともみごとなるきかい
わながゐのゐたなどにれるやすでなり。
やすでのあゐわもゝつともきれいなるなみ
のうんどゝれれあらわすなり。
れとわきくところのへだたりますに
云たがいよわくなるのりれこどもれか〻
りてときあかすにわづのごとく（三づ）イ
のこどもわロハのかたにつかまりロハ
わニホへトのかたにつかまるよゝれ
にな云イれうゐろよりふいにつくな〻
り。云かるときわロハのれのれのが
うけるげきどゝれわイのはんぶんに云て
ニホへトのれのれのがうけるげき〻

三づ。



どゝれわロあるいわゝのはんぶんにてイ
のゐぶんのいちなり。
れとにれいてもこのごとくなりものよ〻
りはゝつ云たるれとのいきれいなりものれと〻
れざかるに云たがいだ〻んだんれゝれくのくゝう〻
云たがゝつてみみにか〻なるなり。
ものあるいわふれざるものあるいわ〻
むけいのものれせいとのつねにめに
ふれるてぢかなるものにたとゐてとけばず〻
いぶんむつか云きことがらもかてん云やすく
なるなり。
かつてゐきたいわすべてのむきに
あつりゝよくれつたゐるのりれせいとに

とわれたるときさのごとくときあかゑれなゑたりづのごとき（四づ）いれもののうちにあるみづのぶんゑれにんげん



四づ

れへやとかんがゑイれとかんがゑれこれれすこゑにてもやのむきにれすとかんがゑるときわらのうばにいるもゝのわとにれされるゆゑうのつぎにいるひとのはれゑちかづきつぎのひとわへだたりれまゑのごとくたもつためまたうのつぎのひとのはれゑちかづゝかねばならぬなり。かくのごとくわづかのひとのいばゑよれかゑられたるがためにへやのうちのこのこらずのひとがたがいにへだたりれひとゑくたもつためうでかざるれゑず。ゐれゆゑひとがただニのはれゑゑりぞかんとするのみならずロハホへのはれゑもゑりぞかざるれゑざるなり。あるいわまたへやのうちにひとがぎつゑりとつまつていると

ゐれぞれゑてもよゑ。ゑかるときロハニホへれへやのゑよれゑとゐれぞれゝ

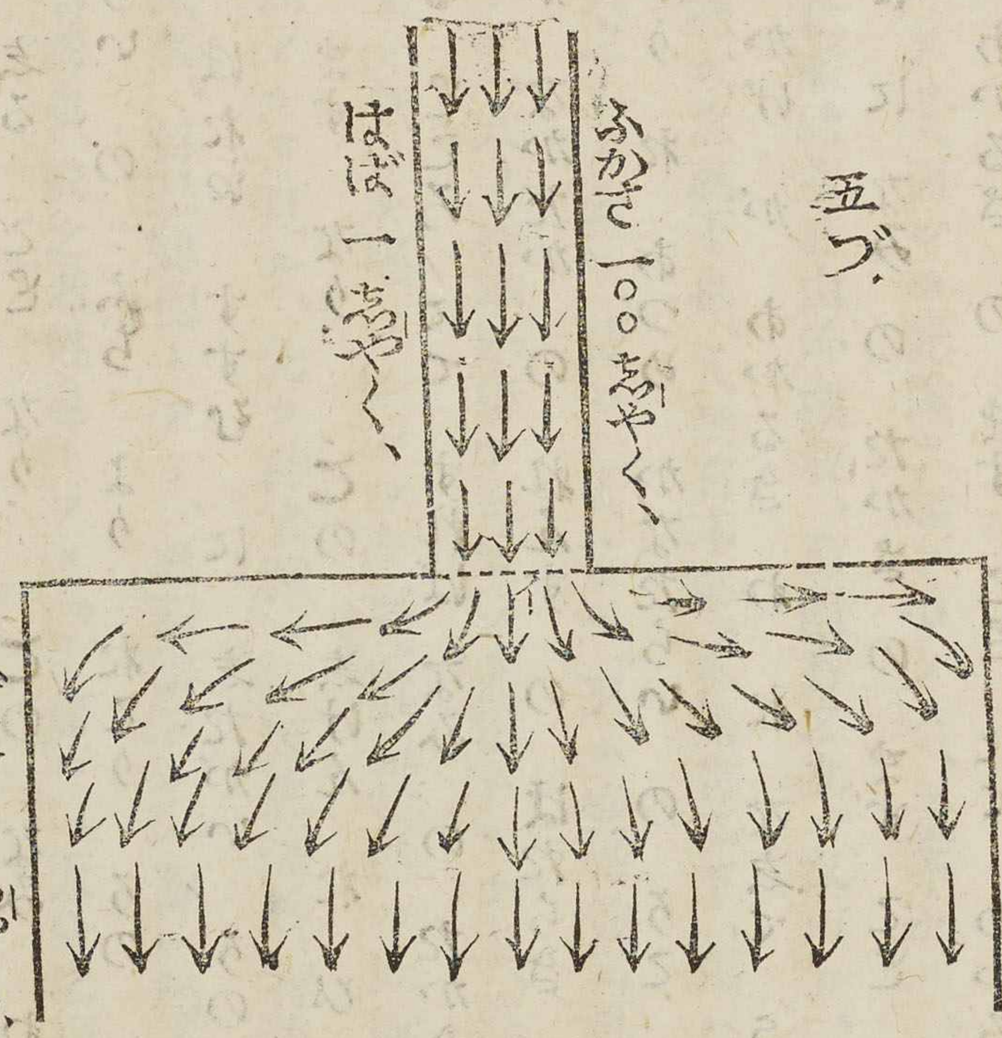
とゐれぞれゑまたこのにんげんわれのれのれのぐるりのひとれすこゑにてもげんざいのへだたりよりわちかづかゑめぬものとゐれぞれするなり。いまいれもの

するときわイのとれれせばロハニれうけるなり。なれこれれがてんゑやゝ

する　ときわ　ィ　の　と　れ　れせば　ロ　ハ　ニ
ホ　へ　の　ゑ　よ　れ　ゑ　ひと　ゑく　てわれる　にいた
る　べ　ゑ。

また　ゐれき　の　ながれ　が　はりがね　の
ごとき　よく　ゐれき　れ　つたゐる　もの　より
つち　あるいわ　みづ　の　ごとき　よく　ゐれき　れ
つたゐざる　もの　ゐ　うつる　とき　はりがね　の
つち　あるいわ　みづ　に　ふれる　めんせき　れ
れ　れきく　せざれば　つぎめ　の　ところ　の　てい＝
こ　れ　はなはだ　ゑき　わけ　れ　さ　の　ごとく　と＝
きあか　ゑたる　こと　あり。　ゐれき　の　ながれ
れ　みづ　の　ながれ　に　たとゐ　はりがね　れ
ふかさ　一〇〇　ゑ　やく　はば　一　ゑ　やく　の
ほりわり　に　たとゐ　つち　れ　ふかさ　一　ゑ　やく
はば　一〇〇　ゑ　やく　の　ほりわり　に　たとゐ
これ　れ　づ　の　ごとく　（五づ）　つなぐ　と　する
とき　わ　「や　の　むき　に　ながれる　みづ　わ
つぎめ　すなわち　ィ　の　ところ　にて　さまたげ
れ　うける　なり。　なれ　これ　れ　が　てん　ゑ　やす＝
く　するにわ　ほりわり　の　うち　に　むれ　れ

五づ。



な　ゑ　たる　れ　れく　の　さかな　が　や　の　むき
に　すすみきたる　と　する　なり。　ゑかるとき　わ
さかな　が　ィ　の　ところ　にて　つかゐて　ゑゆ　うに
すすむ　こと　の　できぬ　こと　あきらか　なり。

ろれゆゑ　みづの　ながれる　に　さまたげ　なき
よ、れ　に　する　にわづの　ごとく（六づ）ふ＝
かき　ほりわりの　はば　れ　一〇〇　ゑ、やく　に
ゑて　ゑかるのち　わさき　ほりわり　に　つながねば

六づ、

つぎめ、

よ、つて　たやすく　がてんせゑむる　こと　あり、
たとゑば　かなだらい　に　みづ　れ　いれ　これ
れ　ゑんがわ　に　れき　ゑんがわ　れ　とんとん　と
あゑ　にて　ふめば　みづ　の　めん　に　いくつも
かさなりたる　まるき　なみ　が　できる　わ　だれ
も　ゑる　こと　なり、　こ　の　なみ　わ　かな＝
だらい　の　ふち　より　れこり　うの　まんなか
の　ほ、れゑ　すすむ　に　ゑたがい　うの　たかさ
が　ます　なり、　こ　の　ゑけん　れ　ひ　の　わ＝
たる　ところ　にて　すれば　なみ　の　たかき　とこ＝
ろが　なかだか　の　れんす　の　はたらき　れ　な　ゑ
ひかり　れ　あつめ　かなだらい　の　うこ　に　なみ
の　かげ　が　あかるき　わ　れ　な　ゑて　うつる　が
ゆゑ　に　なみ　の　たかさ　の　ます　こと　わ　かげ
の　あかるさ　の　ます　こと　にて　わかる、　なみ
の　たかさ　の　ます　わ　なみ　が　ぐるり　の　ひ＝
ろき　ところ　より　だんだん　と　せまき　まんなか
の　ほ、れ　ゑ　ゆき　なみ　の　わ　が　ち、いさく　な＝
ならぬ　なり、
また　ゑ　せん　の　げんぞ、れ　の　り　れ　へい＝
せい　め　に　ふれる　てゐかなる　げんぞ、れ　に

る　ゆゑ　なり、　こ　の　げんぞ、れ　に　よ、つて
いりくち　の　ひろき　いりうみ　ゑ　はいりこみたる

以後ノ學者大抵其善惡ヲ論セザルナシ、孟子ハ之ヲ善トシ、荀子ハ之ヲ惡トシ、揚雄ハ善惡混トシ、韓愈ハ三品ア

るゆゑなり。

このげんぞうれによつて

いりくちのひろきいりうみゐはいりこみたる

うゑれのなみがいりうみのつきどまりゐ

ゆくにゑたがいたかされますことのげ＝

んいんのひとつれときあかゑうるなり。

たらいにみづれいれまたろのうち

にすこゑのすなれいれみづれぐるぐる

とかきまわすときわすながついにわた＝

らいのまんなかゐあつまるべゑ。このこの

げんぞうれによつてかせまたわよりゆう

（くろせがわのでときものの　うれみよれ）

などのちきゆうのひよれめんれひがゑ

よりにゑゐうごくものがきたあるいわ

みなみのはれゐかたよることれときあ＝

かゑうるなり。

（つづく。）

○排孟論

井上圓了

支那哲學中一種其性質ヲ異ニスルモノハ性論ニメ、孟子以後ノ學者大抵其善惡ヲ論セザルナシ、孟子ハ之ヲ善トシ、荀子ハ之ヲ惡トシ、揚雄ハ善惡混トシ、韓愈ハ三品アリトス、其他復性ノ說アリ、本然氣質ノ論アリテ、未タ一定ノ確說ナシト雖モ、要スルニ、世儒一般唱フル所ハ性善論ニアリ、而シテ此論ヲ起スモノハ、孟子ナリ、其書ニ曰ク、仁義禮智非由外鑠我、我固有之也、又曰ク、人性之善也、猶水之就下也、人無有不善、水無有不下、或ハ人皆有不忍人之心ト云ヒ、或ハ仁人心也、又ハ堯舜性者也ト云ヘルアリテ、人ノ性本來善ナルモノト定ムルナリ、然レドモ斯說孟子ノ初メテ唱フルニアラズ、其以前已ニ此說ノ萌芽スル所アルヲ見ル、先ツ詩大雅ニハ天生烝民、有物有則、民之秉夷、好是懿德トアリ、易繫辭ニハ一陰一陽之謂道、繼之者善也、成之者性也トアリ、中庸ニハ天命之謂性、率性之謂道トモ、又自誠明謂之性、自明誠謂之敎トモアリ、唯論語中ニハ判然タル明文ナシト雖モ、其書ニ人之生也直、罔之生也幸而免ト、又道不遠人等トアレハ、稍性善ノ意ヲ胚胎スルモノヽ如シ、孟子蓋シ是等ノ書ニ本ヅキテ、性善論ヲ發シ、自ラ之ヲ創スルニアラズ、然レドモ性善ナリト斷

言シ、且ツ之ヲ論究シテ人ニ良心アル所以ヲ證明セシハ、孟子ヲ以テ濫觴トス是レ孟子ノ性善論ノ祖先タル所以ナリ、

人ノ性本來善ナルヿハ、支那人獨リ之ヲ論スルニアラズ、西洋ニモ古來往々此ニ類スルノ說ヲ唱フルモノアリテ、上世希臘學者中ニ已ニ之ヲ信スルモノアルヲミル、然レドモ古代ニアリテハ其說孟浪トシテ分明ナラザルヲ以テ判然タル定論ヲ考索スル甚タ難シトス、中世以後ニ至リテハ學者中其論スル所判然タルノミナラス、良心固有ノ例ヲ徵シテ其理ヲ究明スルモノアリ、ビショプ、バトラ氏ノ如キハ人ノ是非曲直ヲ判決スルハ本來固有ノ良心アリテ存スルニ由ルト云フ之ヲ其書ニ考フルニ、曰ク、人ニハ第一ニ仁愛ノ天性アリテ存シ、第二ニ公私ノ善道ヲ求メントスルノ情アリ、第三ニ行爲ノ善惡ヲ識別スルノ反省力アリテ、具ハルト、是レ孟子ノ所謂ル人ニ惻隱羞惡辭讓是非ノ心アリト、其義ヲ同フス、バトラ氏又云ヘルアリ、人其刀天然ノ善性ヲ保全スル能ハスメ、却テ之ヲ戕賊スルモノアリト、蓋シ其意人ノ惡ヲナスハ天然ノ性ヲ戕賊スルニ由ルト云フニアリ、孟子曰牛山之木嘗美矣、以其郊於大國也、斧斤伐之、可以爲美乎、是其日夜之所息、雨露之所潤、非無萌蘖之生焉、牛羊又從而牧之、是以若彼濯濯也、人見其濯濯也、以爲未嘗有材焉、此豈山之性也哉、雖存乎人者、豈無仁義之心哉、其所以放其良心者、亦猶斧斤之於木也、及ヒ孟子曰水信無分於東西、無分於上下乎、人性之善也、猶水之就下也、人無有不善、水無有不下、今夫水搏而躍之、可使過顙激而行之、可使在山、是豈水之性哉、其勢則然也、人之可使爲不善、其性亦猶是也ト、同一義ナリ、其他バトラ氏ノホッブ氏ノ自愛說ヲ駁スルカ如キ、孟子ノ楊朱ヲ排スルニ異ナラズ、次ニプライス氏ノ愛他心ヲ論スルバトラ氏ニ類スルアリ、アタム、スミス氏亦同情相憐即チ惻隱ノ本心ヲ以テ諸善行ノ基址トス、次ニリード氏ナルモノアリテ、人ニ本來良心ノ存スルヿヲ論シ、其力ヲ以テ事ノ理非行ノ善惡ヲ判定スルモノトス、然レドモ其論孟子ト異同ナキニアラス、良心ハ生來人ニ存スト雖モ、教育經驗ニヨリテ發達スルアリト云ヘハ、孟子ニ異ナル所ニメ、其性力人間ニノミ存シテ動物ハ之ヲ有セズト云フニ

至リテハ、孟子ノ想スル所ト同シ、ステワルト氏モ善心固ト雖モ、皆多少ノ異同ナキニアラス、蓋シ孟子ノ性ヲ論スルカ如キ極メテ不完全ニシテ、且ツ不分明ナルヲ以テ、甚

至リテハ、孟子ノ想スル所ト同シ、ステワルト氏モ善心固有ノ説ニ至リテハリード氏ニ異ナラズ、ブラオン氏又是説ヲ唱フ、ホエウェル氏ハ道德ヲ以テ人ノ常性トシ、人生ノ目的ハ功利ニ限ルニアラス、此道心ニ合スルモノヲ以テ定メザルベカラズト云フ、フレデリック、フェリア氏ハ人生レナカラ良心トナルベキ元種ヲ有シテ來ルト云ヒ、マンセル氏亦良心ナルモノ天ヨリ賦與スルモノトス、其他天賦良心本來性善ヲ主唱スルモノ一二ニアラズ、耶蘇教ニテハ亞當神禁ヲ犯スヲ以テ其良知良能ヲ失ヘタリト云フト雖モ、尚ホ人ニ自由意志アリ、又本來良心アリテ存スト説ク、佛教亦性ヲ談スト雖モ、其性トハ寂靜不動人之資質者也、亦其本覺者也ト云ヒ、其眞性ハ萬法所依之體也トス、智度論ニ云ク一切色法皆有空分諸法中皆有涅槃性、是名法性ト、是レナリ、然レハ佛教中ニ立ツル所ノ性ハ、善惡未タ分レザル心ノ本体ヲ指スモノニテ、其善惡アルハ性ノ動キテ已ニ情トナルモノトス、故ニ儒ノ性ト云フニ佛ノ情ナリ之ヲ同一視シテ論スベカラス、以上擧クル所ニテリテ之ヲ考フルニ、西洋ニモ孟子ノ説ニ類スルモノアリト雖モ、皆多少ノ異同ナキニアラス、蓋シ孟子ノ性ヲ論スルカ如キ極メテ不完全ニシテ、且ツ不分明ナルヲ以テ、甚タ西洋ノ説ニ比考スルニ苦ム、今其論理ノ不當ナル諸点ヲ掲ケテ之ヲ證スルニ、論理上一事ヲ論セント欲セバ、先ツ其義解ヲ下シ、其何モノタルヲ定メテ、而メ後其善惡ニ及フベシ、然ルニ孟子ハ性ノ定義ヲ與ヘザルヲ以テ、其本義一ニ定ラズ、故ニ後ノ學者或ハ之ヲ惡ト云ヒ、善惡混ト云ヒ、無善無不善ト云ヒテ、異説雜出スルニ至ル、夫レ性トハ何ソヤ、孟子ノ書ニツイテ案スルニ、總メ人ノ本性(インスチンクト)ヲ指スモノヽ如ク、又特ニ良心(コンシエンス)ヲ義トスルモノヽ如シ、西洋ニテハ是両語ノ義解一定セズト雖モ、本性(インスチンクト)ト良心(コンシエンス)トハ決シテ同一ナルモノニアラス、本性(インスチンクト)トハベーン氏之ヲ解シテ教育經驗ヨリ得ザル所ノ本來ノ能力ナリト云ヒ、フィスク氏ハ体機ノ自動ヲ反動作用(レフレキスアクション)ト名ヅケ体機ノ自動ヲ本性(インスチンクト)ト稱スト云ヒ、スペンソル氏ハ本性ハ反動作用ノ複雜シタルモノナリト云フ、是等ノ小異アリト雖モ、通常解スル所ニヨルニ本來固有ノ能力ヲ合稱スルモノニシテ、之ヲ七種ニ分ツ、第一ヲ反動作用ト稱シ、消化器呼吸器等ノ自動

ノアリト、蓋シ其意人ノ惡ヲナスハ天然ノ性ヲ戕賊スルノ、其性力人間ニノミ存シテ動物ハ之ヲ有セズト云フニ

スル作用ヲ云フ、第二ヲ協合應和ノ動作ト稱シ、手足ノ交互移動ノ如キヲ云フ、第三ヲ自發ノ活動ト稱シ、身体ノ自然ニ活動スル勢力ヲ云フ、第四ヲ情緒ノ表現力ト稱シテ、喜怒色ニ發スルノ感應ヲ云フ、第五ヲ執意ノ萌芽ト稱シテ、意志ノ基礎トナルモノヲ云フ、第六辨別力ト稱シ、第七ヲ信念力ト名ヅク、孟子ノ性ナルモノ總シテ此七種ヲ指スカ、又其中ノ一二ヲ云フカ、何レニシテ其善惡ヲ定メテ一方ニ決スベカラス、要スルニ人ノ本性(インスチンクト)ナルモノ善トモ惡トモ判定スル能ハザルナリ、然レモ良心(コンシエンス)ハ之ニ異ナリ、ベーン氏ノ義解ニヨルニ良心(コンシエンス)ハ是非善惡ヲ判シ、及ト惡ヲ去リテ善ニ就カントスルノ心力ニ與フルノ名トス、アベルクロンベー氏ハ人ノ愛慾両情ヲ規定制限スルノ力ナリト云フ、ダーウヰン氏ノ説ニヨレハ、人一時私情ヲ恣ニメ後公利ヲ回想スルトキハ心中必ス不快ノ恩ヲ感スルニ至ル、之ヲ良心トスト云フ、孟子ノ所謂ル性ハ其書中惻隱、羞惡、辭讓、是非ノ四端ヲ擧ケテ證スルヲ觀レハ、此良心ヲ指スモノヽ如シ、然ラハ之ヲ善ナリト云フモ、敢テ不可ナルヿナシト雖モ、是レ全ク生來稟クル所ノ天性ニメ、教育經驗ニヨリテ得ルモノニ非スト斷言スベカラズ、故ニ孟子ノ性ト稱スルモノ之ヲ本性(インスチンク)トナスモ、又之ヲ良心トナスモ、論理上不當ノモノトハ謂ハザルヲエズ、猶ホ其詳ナルハ下段ニ至リテ證明セントス、次ニ孟子ノ論スル所法規ニ合セザルハ、性ノ善惡ヲ論ノ善惡ノ何モノナルヲ定メザルナリ、凡ソ事物ノ善惡ヲ論スルニハ、先ツ其標準ヲ定メザルベカラス、標準ナフシテ善惡ノ分別起ルベキ理ナシ、孟子ハ何ヲ以テ標準トナセシヤ、或ハ云ハン、其善トハ仁義ニシテ其惡トハ不仁不義ナリト、然ラハ其仁義ハ如何ナルモノナルヤ何ヲ標準トシテ之ヲ定ムルヤ、孟子ノ説ク所ヲ見ルニ、仁天之尊爵也、仁人之安宅也、仁人心也、仁也者人也等トアレモ之ヲ要スルニ、本來具スル所ノ性即チ仁ナリ義ナリト云フニ過ギズ、他語以テ之ヲ言ヘハ、性ヲ以テ仁義ノ基礎トナスヨリ外ナシ、而シテ其性ナルモノヽ本体未タ一定セザレハ仁義ノ何タル未タ決シテ知ルベカラス、仁義知ルベカラザレハ、善惡又判スベカラズ、是レ猶ホ甲ヲ定ムルニ乙ヲ以テシ、乙ヲ証スルニ甲ヲ以テスルカ如シ、之ヲ名ケテ循環推論ト云フ、或ハ又

惻隱羞惡ノ心ヲ以テ仁義ノ本体トセンカ、仁ハ博愛ナリ、義ハ宜ナリトセンカ、此二者未タ純善ナルモノト決定スルニ彼唯其善ナルモノヲ引證シ、其惡ノ起ル所以ヲ釋示ノ惡心ノ生スル源因事情ヲ討索究明セザルベカラズ、然

惻隱羞惡ノ心ヲ以テ仁義ノ本体トセンカ、仁ハ博愛ナリ、義ハ宜ナリトセンカ、此二者未タ純善ナルモノト決定スルヲエズ、何ントナレハ、古今萬國之ニ反スルモノヲ以テ道トスルノ時ナキニアラス、不仁ヲ仁トシ、不義ヲ義トスルノ處ナキニアラザレバナリ、社會進化ノ理ヨリ之ヲ觀ルニ、仁ト云ヒ義ト云ヒ善ト云ヒ道ト云フモ其時ニ從其世ニ應シテ變セザルベカラス、孟子ノ仁義豈獨リ不變ナランヤ、此点ニツイテハ余後ニ深ク論スル所アラントス、之ヲ總ブルニ、孟子ノ所論論理法ニ合格セサルハ、第一ニ性ヲ說キテ其定義ヲ與ヘズ、第二ニ其善惡ヲ論シテ之ガ標準ヲ定メザルニアリ、其他子ノ性善ヲ證スルカ如キ、人ニ仁義ノ四端アルヲ見テ推想スルノミ、固ヨリ確乎信スヘキ論據アリテ然ルニアラス、所謂ル一面ヲ見テ全局ヲ判スルモノナリ、人ノ性ノ善ナル果シテ水ノ下ニ就クカ如キナラハ、其自然ノ勢ニ任シテ外ヨリ牽制スルヿナクンハ純良至善ノ人トナラザルベカラス、而シテ人ノ性タル惡ニ流レ易クシテ世間惡ヲナスモノ多キハ、何ソヤ、之ヲ善ナリト論定セント欲セハ、先ツ人ニ利欲爭奪等ノ惡心ノ生スル源因事情ヲ討索究明セザルベカラズ、然ルニ彼唯其善ナルモノヲ引證シ、其惡ノ起ル所以ヲ釋示セザルハ何ソヤ、其實之ヲ知ラザルカ、或ハ知ルモ猶ホ言ハザルカ、何レニシモ彼ノ論スル所極メテ疎ナリト謂ハザルヲエズ、且ツ夫レ之ヲ其書ニ考フルニ曰ク、仁義禮智非由外鑠我也、我固有之也、弗思耳矣、又曰ク、人之所不學而能者其良能也、所不慮而知者其良知也、孫提之童無不知愛其親也、及其長也、無不知敬其兄也、親親仁也、敬長義也、無他達之天下也トアリ、然ラハ孟子果シテ良智良能モ仁義ノ良心モ皆教育經驗ニヨリテ得ル所ナシト信スルカ、人類中往々君父ヲ敬スルヿヲ知ラザルモノアルハ、何ソヤ、父ヲ弑シ兄ヲ害スルモノアルハ、何ソヤ、ロック氏嘗テ人ニ本來固有ノ良心ナキ所以ヲ證セント欲シ、引クニ野蠻人及ヒ從來教育ヲ受ケサル兵卒ヲ以テス、野蠻人中ニハ鄰人ヲ殺害シテ更ニ愛憐ノ心ヲ生セサルモノアリ、兵卒中ニハ市在ヲ劫掠暴奪メ却テ榮譽トナスモノナリ、知ルベシ惻隱不忍人ノ心モ人悉ク之ヲ固有スルニアラザルヲ、縱ヒ又此良心ハ人類固有ノ天性トスルモ、其由

テ來ル本源ヲ究メザルベカラス、故ニ余孟子ニ向ヒテ問ハントス、仁義ノ善性ハ何處ヨリ來リ何者ノ賦與ニ屬スルヤ、或ハ云ハン、天ナリト、天トハ何ソ天果シテ知ルベキヤ、孟子若シ之ヲ知ラハ、何ソ一々證示セザルヤ、是レ皆孟子ノ論理不完全ナル所ナリ、其後宋儒ニ至リ、種々附會ノ說ヲ設ケテ、孟子ノ意ヲ補フト雖モ、亦皆一己ノ私見、信スルニ足ラズ、且ツ其論礎論理法ヲ以テ構成シタルニアラザレハ、爰ニ喋々スルモ益ナシトス、

余是ヨリ性情ノ起ル源因ヲ論シ、仁義ノ何者タルヲ究メ、以テ孟子ノ性論ノ全ク虛妄ニ屬スル所以ヲ證セントス、

凡ソ人ノ性タル一般ニ之ヲ論スレハ、善トモ決スベカラス、惡トモ判スベカラス、其善ナルモノ則チ善ニシテ惡ナルモノ則チ惡ナリト云フニリ外ナシ、其故何ソヤ、曰ク、人ノ本性資質ハ歸スル所、各々其父祖ヨリ遺傳スルモノヨリ、他ニアルベキナシ、其稟クル所ノ資質又氣候食物等ノ外物ニ感觸シテ第一ノ變化ヲ生シ、教育經驗ノ外力ニ應接シテ、第二ノ變化ヲ生シ、而ノ人々各〻一種ノ性ヲ釀成スルニ至ル、故ニ外物及ヒ外力ニ感應スルヿ各〻相異ナレハ、其性ノ不同ヲ生スル、勿論ナレトモ、タトヒ風土教育ヲシテ同一ナラシムルモ、其父母異ナレハ、又隨ヒテ異ナラザルヲエズ、或ハ又其父母同キモ時日ヲ異ニシ、事情ヲ異ニスルトキハ、其子ノ資性亦同一ナル能ハズ、既ニ人々有スル所ノ性、互ニ相異同アル以上ハ、之ヲ斷シテ善ナリト偏定スベカラザル、理ノ當然ニアラスヤ、且ツ性ノ本源父祖ヨリ傳來スルモノトナス以上ハ、其善惡父祖ノ性質ニヨリテ定メサルベカラス、今爰ニ一般世人ノ性質ヲ考フルニ、一人ノ身ニシテ善行ヲナスアリ、惡念ヲ生スルアリ、縱ヒ堯舜ノ如キ大聖人ト雖モ、其思フヿ行フヿ盡ク完全純良ナル能ハサル、余カ保スル所ナリ、斯ク一人ニシテ善惡兩心ヲ有スルトキハ、其子孫ニ遺傳スルモノ亦善惡兩性共存セザルベカラス、且ツ之ヲ對待(ロウオブレチチビナー)理法ニ證スルニ、善惡互ニ相對待スルモノニテ、善ナフノ惡ノアルベキナク、惡ナフシテ善ノアルベキナシ、之ヲ推スニ人性ノ純善ナル能ハザル亦知ルベシ、孟子ノ論此ニ至リテ全ク立タザルナリ、然ラハ人ノ性ナルモノ自然ノ勢ニ任スルトキハ、如何ナル方向ニ對シテ進ムモノト云ヒテ、可ナラシカ、曰ク、其勢苦ヲ去リ樂ニ就カントスルニアリ、何ヲ以テ之ヲ愈〻減少シ社會益〻却歩シ、其極遂ニ國家廢滅シテ人類盡

ク、其勢苦ヲ去リ樂ニ就カントスルニアリ、何ヲ以テ之ヲ證スルヤ、曰ク、廣ク人ノ日々爲ス所行ノ所ニツイテ之ヲ討究スルニ、一トシテ此勢ニ應セサルハナシ、我人ノ朝夕汲々トシテ利名ヲ求メ、日夜孜々トシテ富貴ヲ思フハ、皆快樂ヲ增進セントスルニアラズヤ、夷叔ノ首陽ニ餓死スルモ、楠公ノ湊川ニ戰死スルモ、皆其心竊ニ快樂ヲ期スルアリテ其實死ヲ以テ却テ樂トナスニ至リ、其方角ニ向ヒテ進ムモノノミ、然レドモ是ノ如キハ例外ノ例ニシテ、人間一般ノ性タルヤ、生ヲ長シテ樂ヲ增サントスルニアリ、然リ而シテ其性力中有意ニ發スルモノト無意ニ起ルモノトノ二種アリ、美居ヲ求メ良味ヲ擇ブカ如キハ有意ニ樂ヲ長セントスルモノニシテ、身体疲勞スルトキハ、勢力減殺シ、天氣清朗ニ逢ヘハ、体力活潑ナルカ如キハ、無意自然ニ苦ヲ避ケ樂ニ進マントスルモノナリ、人ノ性力此ノ如キ傾向ヲ有スルニ至リシハ、亦然ルベキ源因ナクンバアルベカラス之ヲ證明スル、甚タ易シ、假リニ人ノ性皆樂ヲ避ケ苦ニ就カントスルモノトセンカ、其勢身体日ニ傷損シ或ハ羸弱シ、勢力ハ漸ク減殺シ、壽命ハ次第ニ短縮シ、人口愈〻減少シ社會益〻却歩シ、其極遂ニ國家廢滅シテ人類盡ク迹ヲ絶スルニ至ルヤ必セリ、フイスク氏曰ク樂アルハ保生ヲ進捗スル所以ニシテ、苦アルハ損命ヲ妨礙スル所以ナリト、其意人ニ苦ヲ避ケ樂ニ走ルノ性アルハ、其生ヲ長クシ存ヲ全フスル所以ナリト云フニアリ、果シテ然ラハ社會ノ今日ニ永續スルモノ其初メ苦ヲ離レ樂ヲ求ムルノ傾向アルニヨル、縱ヒ進化ノ際一二ノ之ニ反スル性ヲ有セシモノナキニアラズト雖モ、其種ハ漸々減少衰滅シテ今日ニ現見セザルノミ、幸ニ長育ヲ此間ニ保持シテ今日ニ傳續スルモノ皆此性ヲ有スル種類タル疑ナシ、斯クシテ元初一種ノ傾向ヲ胚胎スルモノ愈々進遷シテ愈々增長シ、卒ニ今日ノ如キ人類特有ノ天性ヲ見ルニ至ル、之ヲ進化ノ影響ト云フ、單ニ之ヲ言ヘハ、人性ハ唯進化ノ作用ヨリ得ル所ノ一結果ナリ、蓋シ孟子ノ性ナルモノ果シテ此ノ如キ本性ヲ指スカ、若シ然ラハ此性ナルモノ人皆之アリト稱スルモ不可ナルヿナキヲ以テ、余將ニ言ハントス、人性之就樂也、猶水之就下也ト、然レドモ此性タル獨リ人間ニ存スルニアラス、禽獸魚介ニ至ルマテ、苟モ生ヲ宇

醸成スルニ至ルヽ、故ニ外物及ヒ外力ニ感應スルヿ各〻相異何ナル方向ニ對シテ進ムモノト云ヒテ、可ナランカ、曰

宙ニ保存スルノ種類ハ、皆之ヲ有ス、故ニ其有無ヲ以テ人ハ禽獸トヲ別ツヿヲエズ然ラバ孟子ノ性ト稱スルモノ之ヲ指スニアラザル亦知ルベシ　（未完）

○化學命名法ヲ一定スル論

櫻井錠二述

化學命名ニ一定ノ法則ナキハ余輩ノ常ニ憂フル所ナリ而シテ今日我邦ニ發行セル化學書ヲ披閲スルニ著者或ハ譯者各〻其ノ好ム所ニ從フテ物名ヲ稱呼スルニ由リ一物ニシテ數名ヲ有セザルモノ殆ンド絶ヘテ之レナシ例ヘハ彼ノ最モ單一ナル化合物即チ通常所謂鹽酸ナルモノニ水素蘇魯林酸、格魯兒水素酸、水素格魯林酸、鹽酸、鹽化水素酸、等ノ數多ノ名稱アリ煩雜甚シト云フベシ夫レ一物ニ數名アルハ思想上混亂ヲ生スル一大根本ニシテ初學ノ不幸是レヨリ大ナルハナシ而シテ近來諸專門學士相會合シテ各〻其從事スル所ノ學科ニ就テ討議講究シ傍ラ學術上ノ套言ノ和譯ニ着手セリ此時ニ際シコノ弊害ヲ除キ向後我邦ニ於テ用ユベキ化學命名法ヲシテ其ノ宜シキヲ得サシメ且ツ之ヲ一定センヿヲ勉メザレバ他日又如何ントモス可ラザルニ至ルベシ

余ハ今茲ニ化學命名法ノ一定スベキ理由ヲ述ブル而已ニテ如何ナル命名法ヲ用ヒテ可ナルヤハ愚案ナキニ非ザレバ他日ヲ竢テ之ヲ細論セント欲ス然レ𪜈余ノ目的ト爲ス所ハ化合物ニ名稱ヲ付與スルニ當リ一致ヲ要スルヿ是レナリ理學士甲賀宜政氏モ此点ニ就テ既ニ切論サレタリ余モ亦畧〻氏ト意見ヲ同フス（甲賀氏ノ論說ハ載セテ東京化學會誌第一帙第一冊ニアリ）

夫レ化學命名法ノ其一致ヲ得ルハ最モ緊要ナル一點ナリ何ントナレハ化合物ノ組成、構造、並ニ其類似セルモノトノ關係等ハ皆ナ其ノ名稱ニ依テ之ヲ知ルヿヲ得ベケレバナリ例ヘバ「ソヂヤム」ト鹽素トノ化合物即チ通常食鹽ヲ鹽化「ソヂヤム」ト云ヒ水素ト鹽素トノ化合物ヲ鹽酸、水素蘇林酸、格魯兒水素酸、ナド〻稱スルキハ二物間相互ノ關係ハ更ニ之レナキガ如シ然レ𪜈二体何レモ鹽化物ニシテ其構造等ニ至テハ毫モ差異ノアルナシ唯第一ノ化合物ハ「ソヂヤム」ノ鹽化物ニメ第二ハ水素ノ鹽化物ナリ故ニ該二体ハ類似セル名ヲ以テ之ヲ稱呼スベシ然ルキハ一目シテ兩物間ノ關係ハ甚ダ明白ナルベシ即チ若シ食鹽ヲ鹽化「ソヂヤム」ト言ヘバ鹽酸ヲ鹽化水素ト改稱セザルヘカ能ハサルベシ然ルキハ學問ノ進捗モ亦自然障碍サルヽヤ

化「ソヂヤム」ト言ヘバ鹽酸ヲ鹽化水素ト改稱セザルヘカラズ

又水素、硫黃、酸素、ノ一、十六、八、ノ比例ヲ以テ互ニ相化合シタルモノヲ硫酸ト名ツケ銀、硫黃、酸素、ノ五十四、十六、八、ノ比例ヲ以テ化合シタルモノヲ硫酸銀ト稱スルキハ第二ノ化合物ニリモ銀ダケ餘計ニ含有シタルガ如キ思想ヲ與フベシサレ𪜈銀ハ唯水素ノ代リニアル而已ニシテ該二体ノ關係ハ猶ホ鹽化水素ト鹽化「ソヂヤム」ニ於ケルカ如シサレバ亦該二体ハ類似セル名ヲ以テ之ヲ稱呼セザルベカラス即チ硫酸ハ硫酸水素ト改名セザルヲ得ス

右ノ如ク述ベタレバトテ通常日用ノ爲メ或ハ工業場ニ在テハ鹽酸、硫酸、等ノ名ヲ用ヒテ更ニ害ナキ而已ナラス從來言ヒ慣レシ語ヲ廢シテハ不都合尠カラザルベシ余モ亦藥品等ヲ購求スルニハ鹽酸一ポンドト言ヒテ不斷鹽化水素一ポンドトハ言ハザルベシ然ト雖𪜈化學ノ書ヲ著シ或ハ化學ヲ授業スル等ニ當リテ正シキ名稱ヲ用ヒザレハ混亂ヲ生シテ化合物間相互ノ關係ノアル所ヲ知ラシムル能ハサルベシ然ルキハ學問ノ進捗モ亦自然障碍サルヽヤ明白ナリ

サレバ化學命名法ノ其ノ宜シキヲ得ルト得サルト且ツ之ヲ一定スルト一定セザルトハ教育上大ナル關係アリ余ハ我邦化學教員諸君ノ意ヲコヽニ注カレンヿヲ望ムヤ甚タ切ナリ

○七寶燒製造ノ畧記

石藤豐太

抑モ世人ノ七寶燒ト稱シ殊ニ奇翫珍弄シテ措サルモノハ即チ陶器ノ一種類タルヲ免レスメ金器若クハ土器臺ニ金線及ヒ種色ノ配藥ヲ以テ功妙ニ動植物或ハ其他ノ畫像ヲ摸寫シタルモノナリ茲ニ其製法ヲ畧述センニ初頭恰好ノ黃金、銀、銅或ハ眞鍮板ヲ撰ヒ尋常一樣ノ臺器ニハ銅或ハ眞鍮ヲ用ユルヲ常トス左圖ニ示スカ如ク臺器ヲ造成スルニ當テ其両端ヲバ多少外屈セシムル所以ノモノハ該器ヲ塗飾スルニ自然平直ナラシムルカ爲メナリ今ヤ該臺器ニ畫像ヲ摸寫スルニハ直徑殆ト一「ミリメートル」ノ黃金、銀、銅若クハ眞鍮ノ線ヲ適宜ニ切斷シ職工手術ニテ畫像ノ摸樣ニ隨テ自由ニ之ヲ屈撓シ糊類ヲ以テ臺器附着

シ其畫ノ外圍ヲ粧飾ス然リト雖トモ尋常ノ粘糊ヲ使用スルトキハ之ヲ昴熱ニ暴露スルカ故ニ粘糊直ニ燃燼シテ金線決シテ附着セス是ヲ以テ其質頗フル熔解シ易キ合金(通常使用スル所ノモノハ鉛錫「アンチモニー」等ノ合金ナリ)ノ粉末ト粘糊トヲ相調和シ水ヲ以テ之ヲ混捏シテ一種ノ糊類ヲ作リ刷毛ニテ臺器ニ塗リ而シテ金線ヲ飾附シ其干乾スルヲ待ツテ后チ之ヲ熱燒スルトキハ粘糊盡ク燃失シ其含有スル所ノ合金ハ茲ニ熔爛シテ强固ニ金線ヲ附着セシムルヲ得ルナリ蓋シ燒竈ハ昴熱ニ耐ヘ得ヘキ粘土ヲ以テ製作シ燒成スル所ノ器ニ隨ツテ之レカ大小アリト雖モ最小ノ竈ニ至テハ稍ク直徑七八寸高サ八九寸ニ過キス然リ而メ該器ヲ熱燒スルニハ右ノ竈ヲバ土上ニ裝置シ先キニ造成シタル所ノ器物ヲ投入シ中央ニ一孔ヲ穿チタル蓋ヲ以テ其竈ヲ覆ヒ外面ヨリ炭火ニテ猛熱シ温熱將サニ適度ニ達セントスル比ニ同種ノ合金ヲ鉄棍ニ附着シ蓋孔ヨリ之ヲ突入シ其ノ熔解スルヤ否ヤヲ檢査シ合金果メ熔爛スルニ至レバ竈内ノ温熱已ニ適度ニ昇達シタルヲ以テ直ニ炭火ヲ去リ器物ノ冷カナルヲ待ツテ之ヲ採出シ梅酸ニ浸シ以テ其汗物ヲ洗除ス既ニシテ配藥ヲ加スルニ當ツテ一度ニ之ヲ終成スルトキハ全面同時ニ熔解セスシテ畫像ノ貌ヲ爲サヽルノ患アレバ初頭配藥ヲ薄着シ而テ后チ之ヲ熱燒シ又々更ニ配藥ヲ加附メ前條ノ如クシ三四回ニ至ツテ漸ク之ヲ成遂スルヲ必要トス又タ其器ノ冷カナルヲ待ツテ粗砥石ヲ以テ之ヲ磨キ復ヒ熱燒シ而シテ順次ニ滑澤ナル砥石ヲ用ヒ其終ニ至リテ厚朴炭ニテ琢磨スルトキハ愈々光澤ヲ生發スルナリ

七寶燒ニ使用スル所ノ配藥ノ調和左ノ如シ

○白玉　日ノ岡石　唐ノ土

白	五〇	七	七
紺青	五〇	七	七
濃青	七	七	七
薄青	七	七	七
紫	七	七	七

紺青七
濃青五〇
薄青五〇
紫玉五〇

ナリ然レトモ獨リ句点ノ位置ニ至リテハ吾輩之ヲ駁セサル

黃	五〇	七	七	伊豫白日四及至五
赤	五〇	七	七	礬紅 七
黑	五〇	七	七	唐群青 七
黃綠	薄青五〇	一〇	一〇	唐白日 一五
栗色	五〇	七	七	礬紅五及ヒ群青五
桃色	五〇	七	七	黃金 七

以下畧ス

第十二章

○句点位置改正　菊池大麓述

近頃數ヲ記スルニハ西洋ノ記法ニ倣ヒ唯數字ノミヲ列チテ讀者ヲシテ其位取ヲ爲サシムルコトナレリ例ヘハ以前ナレハ十二萬三千四百五十六圓七十八錢九厘ト記ス可キ所ヲ今ハ一二三、四五六、圓七八九ト記スルカ如シ。三ト四。ノ間ニ在ル点ヲ句点ト稱シ六ト七トノ間ニ在ルモノヲ小數点ト云フ小數点トハ其点ヨリ以下ハ圓ノ小數ナルヲ以テナリ句点ハ位取ヲ容易ナラシムル爲メナリ此新法ノ舊法ニ優ルハ今サラ論スルマテモ無ク會計帳簿統計表等ノ如キ多數ヲ扱フ場合ニ於テハ此記法ヲ用ヰサルヲ得サルナリ然レトモ獨リ句点ノ位置ニ至リテハ吾輩之ヲ駁セサルヲ得ス此ニ一ノ例ヲ設ケテ之ヲ説明セン現今ノ方法ハ三字毎ニ句点ヲ置クナリ故ニ十二億三千四百五十六萬七千八百九十一ヲ記スル「左ノ如シ

一、二三四、五六七、八九一

斯ク記スル時句点ハ何如ニシテ位取リヲ容易ナラシムルヤ吾輩ハ更ニ其理由ヲ見サルナリ而シテ其何故ニ斯ノ如ク句点ヲ置クヿニ成リタルヤト問フニ唯西洋ノ記法ヲ丸取リニシタルナリ西洋ニテハ斯ク句点ヲ置クハ理由有ルヿニシテ之ニ由リテ位取リヲ容易ニス何トナレハ西洋ニテハ萬ト云フ名無ク千ヨリ以上ハ十千、百千、ト云ヒ千千ニ名ヲ命シテ「ミルリオン」ト稱シ夫ヨリ十「ミルリオン」百「ミルリオン」千「ミルリオン」十千「ミルリオン」百千「ミルリオン」ト上リ千千「ミルリオン」即「ミルリオン」「ミルリオン」ニ至リテ又名ヲ命シテ「ビルリオン」ト稱ス「ビルリオン」「ビルリオン」ヲ「トリリオン」ト稱ス故ニ第一句点ハ千ノ下ニ置キ第二句点ハ「ミルリオン」ノ下ニ置キ第三句点ハ千「ミルリオン」ノ下ニ置ク等此法實ニ最適當

セリ上ニ記セル數ヲ見レハ直ニ一千二百三十四「ミルリオン」五百六十七千八百九十一ト讀下スヲ得本邦ニテハ之ニ異リ十千ヲ萬ト名ツケ萬ヨリ以上ハ十萬、百萬、千萬、ト稱シ萬萬至リテ又名ヲ設ケテ億ト稱ス或ハ十萬ヲ億ト云フ有レ𪜈現今ハ一般萬萬ヲ以テ億トス故ニ三字毎ニ句点ヲ置カスシテ四字毎ニ句点ヲ置ク可シ然ル時ハ第一句点ハ萬ノ下ニ在リ第二句点ハ億ノ下ニ在リ第三句点ハ萬億ノ下ニ在リ第四句点ハ億々即兆ノ下ニ在リ故ニ位取リハ一見シテ明白ナリ上ノ數ヲ

一二、三四五六、七八九一

ト記セハ直ニ十二億三千四百五十六萬七千八百九十一ト讀ムヲ得之ヲ上ノ記法ト比較セハ何レカ本邦ノ言語ニ適當ナルカハ吾輩之ヲ喋々セス唯今一數ヲ二樣ニ記シテ讀者ノ判斷ニ委ネントス

現今記法　四、五八七、六二一、九四六、三七一

改正記法　四、五八七六、二一九四、六三七一

西洋ノ事物ニハ吾邦ニ於テ之ヲ採用シテ大ニ利益ヲ得ルヿ極メテ多シ然レ𪜈諺ニ言ヘル如ク處かはれは品りはる善ク其原理ヲ究メス人情風俗言語等ノ異ナルヲモ顧スシテ一カラ十マテ之ニ倣フハ決シテ得策ニ非ラサルナリ句点位置ノ如キハ小事ナリト雖又以テ之カ一例トナスニ足レリ

因ニ曰ク統計學會ニ於テ此改正法ヲ用ヰ其會ニ於テ出版セル雜誌ニ於テハ全ク此方法ヲ以テ數ヲ記セリ

又曰ク近頃或ル人ノ説ニ由レハ句点ハ小數点ト混雜ヲ生シ易ケレハ句点ヲ廢シ其代ニ少シク空處ヲ開ケ置キ点ハ唯小數点ノミニ限ル可シト此説ヲ採用スレハ大ニ現今ノ如ク句点ヲ用ユルニ優ル可シト信ス右ニ掲ケタル論ニ於テハ更ニ此説ノ爲ニ動クヿナシ唯句点ノ位置ニ非スシテ空處ノ位置ト云フ可キノミ今此法ニ由リテ上ノ數ヲ記セハ左ノ如シ

四　五八七六　二一九四　六三七一

套言譯語

○物理學譯語會議決　（第　六）

英　Vapor　佛　Vapeur　獨　Dampf　和　蒸氣

英	佛	獨	和
Vapor	Vapeur	Dampf	蒸氣
Freezing pt.	Pt de fusion de la glace	Eispunkt	氷点
Solidifying pt.	Pt de solidification	Gefrierpunkt	凝固点
Melting pt.	Pt de fusion	Schmetzpunkt	融解点
Ebullition	Ebullition	Sieden	沸騰
Boiling pt.	Pt d'ébullition	Siedepunkt	沸騰点
Dew pt.	Pt de rosée	Thaupunkt	露点
Heat	Chaleur	Wärme	熱
Latent	Latente	Latente	潛
Calorimeter	Calorimètre	Calorimeter	熱量計
Maximum Tension	Pension max.	Max. spunning	最大壓力
Saturation	Saturation	Sättigung	飽和
Relative humidity	Etat hygrometrique	Relativ Feuchtigkeit	濕度
Hygrometer	Hygromètre	Hygrometer	濕度計
Spheroidal state	Etat spheroïdal	Sphäroidaler Lustand	球形狀
Radiation	Rayounement	Strahlung	輻射
Absorption	Absorption	Absorption	吸收

ナ極メテ多シ然レ𪜈諺ニ言ヘル如ク處かはれは品りはる

Mechanical equivalent of heat	Equivalent méchanique de chaleur	Mechanische Aequivalenz der Wärme	熱ノ工比率
Vaporization	Vaporization	Verdampfung	氣化
Evaporation	Evaporation	Verdunstung	蒸發
Sublimation	Sublimation	Sublimation	蒸昇
Conduction	Conductibilite	Leitung	傳導
Regelation	Regel	Regelation	復氷
Diffusion	Diffusion	Diffusion	交和
Pykuometer 又ハ sp. gr. bottle	Facon à densité	Pyknometer	比重瓶
Syphon	Syphon	Heber	吸上ケ
Anemometer	Anémometre	Windmesser	風計
Specific Heat	Chaleur spécifique	Sp. Wärme	比熱
Thermal Capacity	Capacité Calorifique	Wärme-capacität	容熱量
Light	Lumière	Licht	光ヒカリ
Ray of Light	Rayon de lumière	Lichtstrahl	光線
Heat ray	Rayon calorifique	Wärmestrahl	熱線

（以下次號）

○東京化學會譯語議決　（第四）

Fuel		燃料

○東京化學會譯語議決　（第四）

Filtration	濾過
Flame	焰
,, , inner	內焰
,, , outer	外焰
,, , oxidizing	酸化焰
,, , reducing	脫酸焰
Flashing point	引火点
Flux	熔劑
Formula, constitutional	構造式
,, , empirical	實驗式
,, , graphical	圖解式
,, , molecular	分子式
,, , rational	示性式
Fractional distillation	分溜
,, neutralization	分和
,, precipitation	分澱
Freezing mixture	生寒劑
Fuel	燃料
Fume	煙
Fuming acid	發煙酸
G	
Galvano-plastic	電鑄術
Gas	氣体
Gaseous	氣狀ノ
Gasometry	測氣法
Gilding	鍍金法
Glass	玻璃
Gum	樹膠
H	
Halogen	類鹽素
Haloid	類鹽化物
Heat, specific	比熱
Hygroscopic moisture	濕分
,, substance	吸濕物

（以下次號）

雜錄

○漢學宜ク洋學ニ降參シテ其一部トナル可シ

芳野山人

維新以來世人ニ見捨ラレシ漢學此二三年來擊劍茶ノ湯謠曲等ト共ニ稍恢復ノ徵ヲ顯シ其學ニ從事スル者ノ悅ヒ一方ナラス先ニハ鬱憤ノ余リ海ニ飛込テ死スルニ至リシモ(此一事ハ東京學士會院雜誌第五編三十一葉及ヒ學藝志林第七十册四百二十八葉中村正直先生ノ論中ヨリ取ル)今ハ斯文盛ニ行レ門弟ノ數モ多クナリ漢學先生ノ面モ自ラ微笑ヲ含ムカ如シ此時ニ當リテ余聊カ漢學ノ爲ニ忠告セントスルアリ即チ他ニ非ス今稍恢復シタル位置ヲ保タントセハ宜ク速ニ洋學ニ降參シテ其一部トナル可シト云フナリ若シ一時ノ繁昌ニ醉ヒ我ハ洋學ト同位ノモノナリト思ヒ之ニ敵對スル如キ意アレハ其再ヒ微々タル有樣ニ立行ンヿ煙草三服ヲ吸フ内ノヿナリ其理由左ニテ明白ナル可シ

抑モ我邦ニテ洋學ト稱スルモノハ其始歐米ヨリ入リ來リシ故ニ此ノ如キ名ヲ與ヘ外國ノモノノ樣ニ見爲セトモ其實ハ決シテ歐米ニ固有ナル學ニ非ス世界ノ學ト稱シテモ可ナルモノニシテ之ヲ西洋學ト呼テ宜ケレハ之ヲ東洋學ト稱シテモ仝ク宜キ理ナリ又英學ト名ケテ宜ケレハ之ヲ皇國學ト稱メモ更ニ差支ナキナリ譬ハ世ニ洋學ト稱スルモノノ内ニ化學ト云フ學科アリ水ノ分子ハ水素ノ二原子ト酸素ノ一原子ヨリ成ルモノナリト敎ユ是レ英國ノ水ニテモ支那ノ水ニテモ日本ノ水ニテモ水デサヘアレハ此組成ヲ有スルモノナリト云フヿナル可シ又洋學ノ一科ナル物理學ノ示スニ大氣ノ壓力七百六十ミリメートル(晴雨儀ニテ測ル)ノ時ニ海面ニ於テ水ヲ温メ攝氏百度ニ至レハ沸騰ストアリ此ハ決シテ佛蘭西而已ニアラス日本ニテモ同シヿナル可シ又博言學(フヒロロヂー)ト云フ學科アリ其ノ敎ユルニ普ク世界ノ言語ヲ比較スルニ凡ソ言語ノ始ハ人ノ耳ニ觸ルヽ自然ノ音ヲ眞似シテヨリ次第ニ起リタルモノノ如シトアレハ此事實ヲ證センニハ英佛獨及ヒ其他ノ印度歐羅巴ノ言語ハ勿論支那日本亞米利加印度ノ語マテモ參考シタル後ニテ定タル事ニシテ其發見シタル法ハ獨リ洋語ニ當ツ可キモノニ非ス世界中何ノ語ニ當テモ宜キ法ナリ又

哲學ノ歴史ヲ記サントセハ洋學ノ務ムル所ハ古來希臘羅馬ヨリ近代ノ歐米哲學ハ勿論釋加、孔孟ニモ及サントスルニアリ以上述ル所ノ二三ノ例ヲ以テ洋學トハ一地方ノ學ニ非ス世界ノ共有物ニシテ萬國普通ノ學或ハ眞ノ學問ト稱シテモ可ナルヿ明瞭ナル可シ

然レハ則チ漢學ハ此ノ如キ學問ニ對シ如何ナル位置ヲ占ム可キヤ之ニ降參シテ其一部トナルヨリ外ナカル可シ漢學中更ニ理學ノ如キモノアルヲ聞ズ故ニ造化ノ理ヲ敎ヘソトセハ漢學ハ洋學ニ借ラザル可ラズ又漢學ノミニテ眞ノ哲學者トナルヿハ難カル可シ成ル程孔孟ノ道丈ニハ明ルシト雖モ支那ノ外ノ世界萬國ニテハ哲學上如何ナル思想アリヤ、ライブニッツ、デカート、カント、ヘーゲル、フヒヒテ、スペンセルノ名ヲダニ知ラズシテ哲學者ノ名ハ下ス可ラス漢文學ハ美ナレ𪜈英文學、佛文學、獨逸文學、羅甸文學、希臘文學、アラビヤ文學、印度文學等ヲ不殘集タル洋文學ト對立スルノ理ナカル可シ英文學、佛文學及ヒ其他諸國ノ文學ト同シク洋文學中ニ列ス可キモノナリ洋學ハ完全シタルモノナリ漢學ハ欠タルモノナリ然レハ則チ漢學ハ洋學ニ降參シテ其一部トナルヨリ外ナカル可シ以後漢語ヲ專門トセントスル者ハ宜ク博言學ノ理ヲ知リテ後ニ之ヲ漢語ニ當ントスル可シ支那歴史ヲ專門トセントスルモノハ先ツ世界一般ノ歴史大畧ヲ知ツテ後ニ支那ハ世界ノ進歩ニ對ヒ如何ナル功能アリシモノナルヤ如何ナル害ヲ爲セシモノナルヤヲ探究ス可シ支那ノ法律ヲ撿ントスルモノハ先ツ法律ノ理ヲ知ツテ後ニ其專門ニ向フ可シ今茲ニ洋學者中ニ支那ノ動植物或ハ地質ニ委キ人アリトセハ世人恐ク〻ハ之ヲ呼テ漢學者トナサズメ支那ノ事實ヲ以テ專門トナス洋學者アルモ更ニ怪サル可シ若シ支那ノ動植物地質ヲ知ツテ洋學者ニ列スルヲ得レハ支那ノ風土人情言語歴史モ學ヒ樣ニ因テハ洋學タルヲ得ベシ向後漢學ヲ修ムル者ハ洋學即チ世界普通ノ學問ノ法方ニ從ヒ漢學ヲ修メ化學者、物理學者、生物學者、博言學者ト共ニ肩ヲ列シ洋學者ノ内ニ立ンヿヲ請フ可シ若シ過テ洋學ト同位ノモノ或ハ之ニ敵對ス可キモノト考ヘ舊ニ依リ新キヲ嫌ヒ他ノ學科ノ向フ所ヲ知ラザレハ再ヒ衰微センヿ爪立シテ待ツ可キナリ余輩聞クニ米國ニテ南北戰

爭ノ終ニ南軍ノ大將リ—降參ノ徵トシテ北軍ノ大將グラ—ソトニ己ノ劒ヲ渡セシニグラント曰ク此劒ヲ辱シメサルモノハ唯君而已ナリト之ヲ再ヒリ—氏ニ歸セシト云フ洋學モ亦殘虐ナル敵ニ非ス降參者ヲ取扱フ事寛大ナリ漢學ヲ修ムルノ人今ハ千八百年代ノ末ニシテ一刻モ後ル可カサルヲ覺リ速ニ使者ヲ遣シテ降ルヲ乞フベシ

○素徒(シロオト)西洋料理法緒言

汲々夫

僕体質極メテ柔弱ナリト雖モ平素攝生ニ注意スルカ爲メカ醫師ヲ煩ハセシヿモ少ナク自ラ以爲ク世間又僕ノ如キ無病者ナシト然ルニ去年春頃ヨリ何故カ相逢フ人毎ニ貴樣ハ甚タ衰弱セリ或ハ瘦癖セリト云ヒ或ハ勉强カ何カ度ノ過クルニ非スヤト云ヒ種々樣々ニ評スレヒ僕自ラ信スルヿ厚キカ故ニ更ニ以テ意トセサリシカ六七月ノ頃友人ト郊外ニ遊歩シ日暮ニ至リ一茶店ニ投シ晩餐ヲ喫スルノ前一浴シテ涼ヲ納レント數名ニテ浴室ニ到リシニ友人皆僕カ体肉ノ疲羸ニ驚カサルハナシ僕友人ノ肥滿ヲ視テ始メテ我カ身体ノ全ク强健ナラサルヿニ氣付キ鏡ニ對シテ顏色ヲ視レハ急ニ憔悴セルカ如キ心地スルヲ以テ翌日橋本國手ノ診斷ヲ請ヘリ國手僕ヲシテ小童ノ時ヨリ今ニ至ル攝生上ノ履歷ヲ詳述セシメ且ツ全身ヲ驗査シ終リテ曰ク子カ衰弱ハ度ノ過クルヿアルカ爲メナルカハ知ラサレヒ主トシテ度ノ足ラサルヿアルニ由ルナリ即チ運動ノ不足是ナリ子ノ病ヲ治スルニ三要件アリ第一毎日庭園ヲ掃除シ或ハ畦圃ニ從事シ外出スルヤ務メテ歩行シ寧ロ勉强ノ時間ヲ欠クモ運動ノ不足ヲ生スルヿナカレ第二食時ヲ規正ニシ滋養物ヲ食スヘシ即チ毎朝時ヲ定メテ夙ニ起キ豆茶(コーヒ)ト麵包(パン)ヲ喫シ午飯ニハ小量ノ籩豆ヲ用ヒ午後五時半ヨリ六時半ニ至ル滿一時ノ間ニ洋食ヲ喫シ六時半ヨリ七時半迄戸外ニ遊歩シ其ヨリ勉强シテ十時ニ至レハ夕刻喫セシ物ハ既ニ消化シ盡セルヲ以テ寢ニ就キテ必ス能ク安眠スルヲ得ヘシ第三時々旅行シ萬事ヲ打チ弃テ〻浩然ノ氣ヲ養フヘシ攝生ノ法斯ノ如クニシテ止マサレハ病治セサランヿヲ欲スト雖モ得ヘカラサルナリ云々僕大ニ國手診斷ノ丁寧ナルト教示ノ懇切ナルニ感シ運動上ニ執リテハ雨雪急遽ノ際ヲ除クノ外ハ必ス歩行シ間暇ヲ以テ畦圃ニ耕シ食事上ニ於テハ固ク國手教示ノ時刻ヲ守リ洋食ヲ不二見軒ニ執リテ喫セリ然ルニ不二見軒ノ食美ナラサルニ非サレヒ國手ノ言ニ從ヒ必ス一時間ヲ費シテ之ヲ喫セ晩餐二人前ノ調理ヲ記載セント欲シ先ツ緒言ヲ述フルヿ如斯

不二見軒ニ執リテ喫セリ然ルニ不二見軒ノ食美ナラサルニ非サレヒ國手ノ言ニ從ヒ必ス一時間ヲ費シテ之ヲ喫セント欲セハ軒ヨリ齎セル食物ハ全ク冷ヘ渡リテ大ニ其味ヲ損シ從テ洋食ヲ厭フノ情ナシトセス加之魚肉ヲ目前ニ置キ一皿ヲ食シ終ルノ後次皿ヲ執ルハ尚早シト洋犬カ御預リヲスル樣ニ時計ノ鈔ノ御許シヲ待ツモ餘リ氣ノ利カヌ咄ナレハ何トカ法ヲ變セサル可ラスト色々案ヲ廻ラシタル末洋食ヲ手製シタランニハ冷食ノ憂モナク永待チニ退屈スルヿモナカルヘシト思ヒ付キ「ジーグル」氏ノ割烹書ヨリ成丈ケ簡易ニ製スヘキ物ヲ撰ヒ或ハ西洋人及ヒ其庖僕等ニ聞キ齧リ有合セノ鍋釜ヲ用ヒテ日々必ス一新味ヲ調理スルヿト定メ一味ヲ食シ他味ヲ待ツノ間ニハ割烹書ヲ開キテ翌日ノ準備ヲナシ調理成ル毎ニ之ヲ筆記シ積ミテ數十味ニ至レリ而シテ僕ノ經驗ニ據レハ晩餐ニ二人前(但シ小量)ノ價平均四十錢ニ超フルヿナク之ヲ日本料理ニ比スレハ返テ廉價ニシテ趣味アルヲ覺ヘタリ當今世人ノ注目漸々体育攝生等ニ及フノ際僕ト同樣ノ需要ヲ感スルノ人尠ナカラサルヲ信シ本誌ノ餘白ヲ仮リテ毎號一晩餐二人前ノ調理ヲ記載セントヲ欲シ先ツ緒言ヲ述フルヿ如斯

○巽軒詩鈔序

宮崎道三郎

一大家出焉天下靡然奉爲標的。価規背矩。務摹倣而不止。其弊也高古者流爲枯淡。奇幻者變爲怪僻。清麗英爽者化爲浮華。爲疎豪。均出于一源。而其氣力不相及遠矣。於是有豪傑起而排舊習。一字一句。務出奇以反先輩之爲。天下已厭陳腐。乃喜其能新。競相摹倣。而詩風遂復一變。古今三千年。詩體之變。要如此耳。漢魏邈矣六朝之詩文勝於質其弊也浮華於是陳子昂張九齡以蒼勁之筆。出而排之。而唐詩漸振。然時猶屬草創。未能袪六朝宮掖之風。能袪之者其李杜歟。故韓昌黎嘗賞其功。以比治水之航。磨天之刃。詩至二公。可謂盡美矣。然二公同其時。而不齊其體。若夫天馬行空。不可羈勒者。非青蓮之詩乎。蒼蒼莽莽。若登崑崙而瞰黃河者。非少陵之詩乎。要之少陵以沈鬱見長。青蓮以飄逸得妙。其故何也。曰。其體不殊其人不足自成一家也。繼李杜起者爲韓白。然李杜之前無李杜。故縱橫馳驟。雖得任其奔放。至韓白之時。則李杜在乎前。我所欲言。彼已言之。苟拘

泥焉。則跋蹇瞻顧。幾乎一步不可行矣。於是昌黎尙奇警。務言人所不敢言。香山尙坦易。務言人所欲共言。纔以自異。然終不能脫李杜窠臼也。韓白之所以不及李杜。其在於此耶。宋以下宗唐。而詩運之淪胥亦甚矣。然觀其所謂詩人。不專事撫仿。而自出機軸者常得勝而抱柱守株不敢踰限一步者必埋沒無聞嗚呼欲以詩成一家者其亦可不察乎本邦詩家亦不乏其人。前之祇南海梁蛻巖源白石。後之菅茶山賴杏坪梁星巖賴山陽。是其尤也。余讀其詩。有豪放者。有流麗者。有奇險者。有清新溫雅者。究之邯鄲之學步。里人之傚顰。不足以樹一赤幟。宜矣其遠不及漢土也。余也修法學者非詩人也。然自幼嗜詩文。每談及此。亦未嘗不嘆息也。一日學友君廸袖詩卷來。徵序於余。披而覽之。則其講學之餘所作也。而葩柴繽紛。光怪錯落。短則二十字。長則二三百韻。往往取泰西詩意。出以漢土文字。比諸先輩所爲。迥然別矣。嗚呼君廸齡未滿三十。而其所爲。業已如此。余知數年之後。直駕蛻巖白石諸子而上。而其飄逸者。必如天馬行空。不可羈勒。沈鬱者。如登崑崙而瞰黃河矣。君廸平生專攻哲學。著書已行于世。固不待余喋喋也。是爲序。

中村敬宇曰。士文與君廸。才學相伯仲。一究心法律。一用力哲學。如詩文若不深致思者。然詩文亦足以名于世矣可知學識其本根而詩文特其支流。此文一氣盤旋。渾浩流轉。唯士文可以叙君廸之詩矣。

學會記事

東京生物學會　明治十六年十二月廿一日(第三土曜)午第二時ヨリ東京大學三學部內ニ於テ通常會ヲ開ク會員二十四名出席江沼元五郎氏朝鮮國紀行之概畧ヲ演セラレタリ右終テ役員ヲ改撰シ午后第四時三十分閉會ス

役員

會長　箕作佳吉　幹事　石川千代松

副會長　松原新之助　幹事　佐々木忠二郎

○明治十六年十二月十五日午後一時ヨリ例場ニ會ス、萬年會ヨリ同會報告第五輯第九卷ヲ、農商務省工務局ヨリ同局月報第十二號ヲ、會員高松豐吉ヨリ「ゼ、ヂョルナル、オフゼ、ソサイエテ井ー、オフ、ケミカル、インダストリー」九月分ヲ寄贈セラレタリ」曩ニ故會員小林孝一君ノ卒業

論文中同君ノ研究ニ係ル部分ヲ抜萃シテ本會ノ會誌ニ登載セントスル旨ヲ決議セリ今回會員福田良作君本會ノ請ニ應ヘも輸入しさるシーメンス電氣燈と稱そるゝ同氏の發明に係れり

論文中同君ノ研究ニ係ル部分ヲ抜萃シテ本會ノ會誌ニ登載センコトヲ決議セシニ今回會員福田良作君本會ノ請ニ應シ小林君ノ履歴並ニ卒業論文抜萃ノ草稿ヲ送ラレタルヲ以テ右報酬トシテ金五圓ヲ福田君ニ贈ルコトニ決ス」次ニ久原躬弦君有機鹽基ニ關スル化學輓近ノ進歩ニ就キ前會ノ續ヲ演說ス、次ニ吉岡哲太郎君本邦石鹹ノ原質物ニ就キ演說ス、又雜話中高松豐吉君ハ本邦白粉製造ニ必用ナル炭酸ハ全ク外氣ヨリ槽中ニ潛入スルモノニシテ醋酸ヨリ生スルモノニ非ラサルコトヲ說明ス、次ニ櫻井錠二君ハ簡單ナル器械ヲ用ヰ化學作用ニ由リテ熱ノ起ルコトヲ証明ス、此日出席會員十六名ナリ

雜報

○シーメンス氏　有名なる電氣學者ソル、チャーレス、ウヰルリヤム、シーメンスハ昨年十一月十九日死去しタリ氏ハ獨乙國ハノバーの人にして一千八百四十四年始て英國に來り一千八百五十九年遂同國の籍に入りタリ學術上及學術應用上氏の發見發明ハ枚擧そるに遑有らそ近頃日本へも輸入しタるシーメンス電氣燈と稱そるハ同氏の發明に係れり

○石黑五十二君　同氏ハ今般東京大學に於て衛生工學の講義と爲さるゝことに爲りタりと

○倫敦「ロヤル、ソサイテー」同學會ハ昨年其賞牌を授與しタることと左の如し「コプレー」賞牌（但しコプレー氏記念の爲に設けタる者ならん）ハソル、ウヰリヤム、トムソンへ其試驗及數理上物理學殊に越歷學及熱動學に於て爲シタる研究發見及「ユニウェルサル、ヂフシペーション、オフ、エネルジー」の定綱發見の爲めに授與し又ホユスト氏ハ純正數學上ボコトン、サンダーソン氏ハ生理學及病理學上に大功有ると以て各一賞牌を授與しタり

○奇學科　ヒラデルヒア府ペンシルワニア大學に於て一の奇異なる學科を新設せり即ち昨年三月教授ヘンリー、サイベルト氏死去の時六萬弗を大學に寄附して哲學科中に「スピリチュアリスム」科を設けんことを要求せしに同學ハ之を承認せりと云ふ

（獨逸繪入新聞）

○チヤプリン氏　東京大學舊御雇教師米人チヤプリン氏

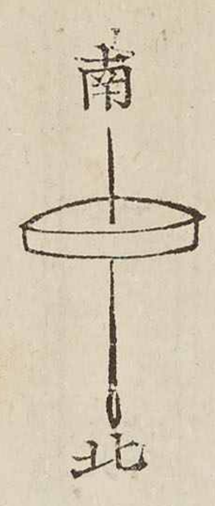
沈鬱者。如登崑崙而瞰黃河矣。君延平生專攻哲學。著書已行于世。固不待余喋喋也。是爲序。

丸月分ヲ寄贈セラレタリ」曩ニ故會員小林孝一君ノ卒業

い近頃ニユーヨルク州ユニホン大學校にて數學及物理學教授に任せられたる由

○單一の物理試驗第一　針尖に油を附け之を水面に觸れのむれば七色の小輪顯出を

○單一の物理試驗第二　縫針に磁氣を附け薄く切りたるコロップ」栓に刺し獨樂の如き浮子數個を作り北極を下にして隨意に大水桶上に浮かふれば浮子互に其位置を變し遂に規整ある五角六角等を作る



○單一の物理試驗第三（理學淚）　胡弓に擦り附くる松脂少許を小匕にて熔解し之を冷やして當に半流動ある時冷水に投ぜれば脆性の形塊「イロ」を得名けて理學淚と云ふ

今爪を以て其尖「イ」を折り或い小刀を以て之に疵つくるときい淚体龜裂を其狀恰も松實（マツカサ）のごとし此現象い「ボログニ」玻璃と齊しく分子の張力に原因をる者あり華氏七十度以上の水にて冷やせる淚い右の性質を有せず水愈々冷かれば淚愈々脆し三十二度の水を用ふれば淚自ら水中に龜裂を四十度を以て最も適當とを理學淚い空中に置くと一二時間許りかるときい全く其性質を失を（マヽゴニ）

○此頃本邦にて哲學の振いさるを慨し外山正一井上哲二郎の両君を始とし　井上圓了　三宅雄二郎　千頭德馬　棚橋一郎　有賀長雄　寺田福壽　千賀鶴太郎　辰己小二郎　長澤市藏　日高眞實　二見康時　坂倉銀之介　加納治五郎　濱野定四郎　戸田恒太郎　福富孝季　松本源太郎の諸君相集り加藤弘之　西周　中村正直　島地默雷　原坦山等の諸先生をも招引して哲學會を興さんと企てられ其目的とをる所い專ら哲學に關をる演說討議質疑解答を爲し著書新聞雜誌上に見る所にして苟も哲學に關係をる者ある時い互に之を報道し且つ其得失是非等をも論じ西洋の哲學を比較參照をるにある由にて來る二十六日錦町學習院内にて初會を開ゐるゝと云ふ

○獨乙虎列刺委員　虎列刺病の源因を探究をる爲獨乙國より派出しをる委員い初め印度ボンベイへ行く筈ありしが研究にいカルカツタ方が尙ほ都合好しとて同所へ行くことに決しさりと

○萬國本初子午線及普通計時法公會　米國大統領い愈來る十月一日同會を華盛頓府に於て開く可しと決しさり尤も歐洲諸大國も多くい同意を表し各三名より多からざる委員を同會へ派遣をる由此會の主旨大畧い本誌第廿一號に記載せり

見ノミヲ生長セシメシヨリ其人民カ次第ニ強健勇壯ノ